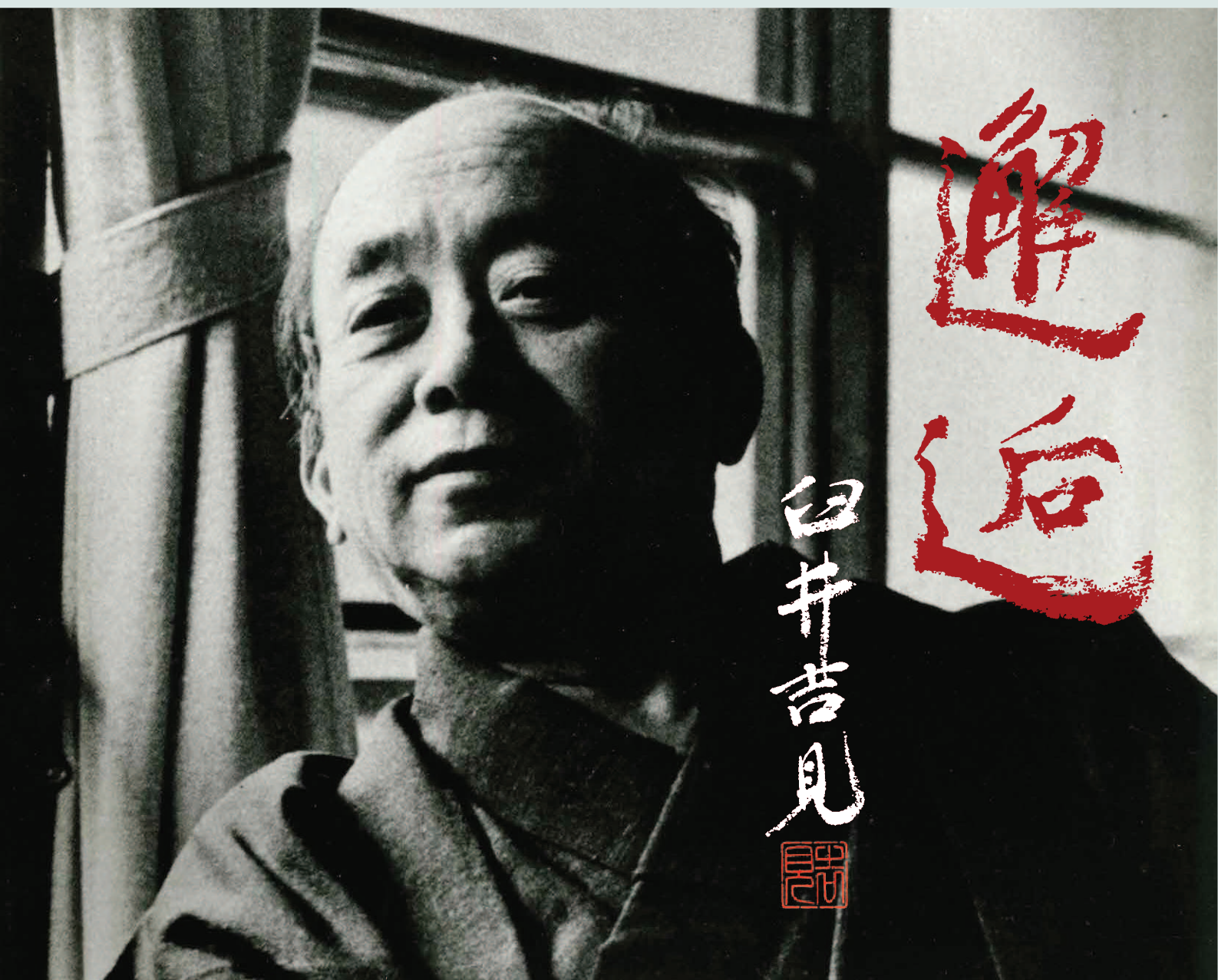


白井吉見文学館
開館30周年記念誌



巻頭言

今に生きる白井吉見先生の言葉 —— からだを動かし、頭で考え、心に感ずる ——

安曇野市教育委員会教育長 橋渡 勝也

白井吉見文学館が、先生の生誕の地である安曇野市堀金に開館して三〇周年の節目の年を迎えました。これまで、白井家ゆかりの方々はじめ、友の会、指定管理者、筑摩書房など多くの皆さまのお支えに、心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、安曇野市は、平成二十九年四月から教育大綱の基本方針に「たくましい安曇野の子どもの育成」を掲げ、育てたい具体的な子ども姿として白井先生の「からだを動かし、頭で考え、心に感ずる」を引用させていただきました。これは、昭和四十二年三月十二日に信州大学附属（長野）中学校開校二〇周年記念講演「中学生諸君にのぞむ」の中で、生徒たちに自ら語りかけた言葉の一つです。

この同じ言葉を、当時、長野市立三輪小学校では、新たな学校教育目標にしたいと考え、昭和四十三年十一月十二日に白井吉見先生PTA講演会を開催しています。私は、その記録を改めて読み返してみました。延々二時間を超えたと伝えられる講演での先生独特の語り口、よどみなく溢れる興味深い話題から、白井先生にお会いしたことがない私の眼前に、自信と気迫に満ちたお姿が現われてくるようでした。

この講演で先生は、「自分のからだ・頭・心を使って」「自ら考え、判断し、行動すること」が「人間の条件」であると、訴えています。そして、「判断力を高めるには、自分と違う考え、反対意見に耳を傾け、相手の立場を理解すること。人間をつくるには、子どもの時から常に自分の目で見、自分の心で感じ、自分のからだで受け取ることが重要だ」と、繰り返し強調されました。

現在、世界中が先の見通せない混沌のただ中ではありますが、私たちは目指すべき理想の人間像を、白井先生が当時熱く語られたこの「人間の条件」に方向性を合わせ、その実現に向けて邁進することが必要ではないでしょうか。

これからも、時を経て決して色あせない白井吉見先生の思想や言葉、業績を顕彰する白井吉見文学館が、安曇野の人々の心の拠り所として、また、日本の文化や教育を先導する存在として、輝きを一層増していくようご期待申し上げます。

*1 この講演会は、ちくまぶつくす9「自分をつくる」(一九七九年初版・筑摩書房)、同名書(二〇〇八年初版・白井吉見文学館)に収められている。

*2 講演会当日したためた色紙「からだを動かし あたまを働かせ 心に感ずる」が、現在も三輪小学校の校長室に掲げられている。

*3 白井吉見先生講演記録「人間の条件」(手書きガリ版印刷二十六ページの冊子) 安曇野市文書館所蔵

*4 旧堀金村は、郷里の大先輩である白井吉見先生の講演会を堀金中学校で三年に一度開催したが、私の在学中には残念ながらその機会に恵まれなかった。



巻頭言..... 1

第一部 文学館収蔵資料..... 3

・ 著作物・書簡・ゆかりの品.....

第二部 文学館のあゆみ..... 10

- ・ 文学館開館まで..... 10
- ・ 平成三年 文学館開館 堀金村直営..... 14
- ・ 平成四年〜平成一六年 堀金村直営..... 16
- ・ 平成一六・平成一七年 白井吉見生誕百年 堀金村直営..... 20
- ・ 平成一八年〜平成三〇年 安曇野市指定管理..... 22
- ・ 令和元年〜令和三年 安曇野市直営..... 30
- ・ こぼれ話..... 31

第三部 友の会..... 34

- ・ 読書会..... 34
- ・ 研修旅行..... 38

第四部 年譜等..... 40

- ・ 年譜 白井吉見、文学館、著作..... 40
- ・ 講演会記録..... 42
- ・ 白井吉見関係資料紹介..... 44

第五部 寄稿..... 45

- ・ 白井高瀬氏・太田治子氏・三島利徳氏・赤羽康男氏..... 45
- 参考文献、執筆者一覧..... 47

終わりに..... 48

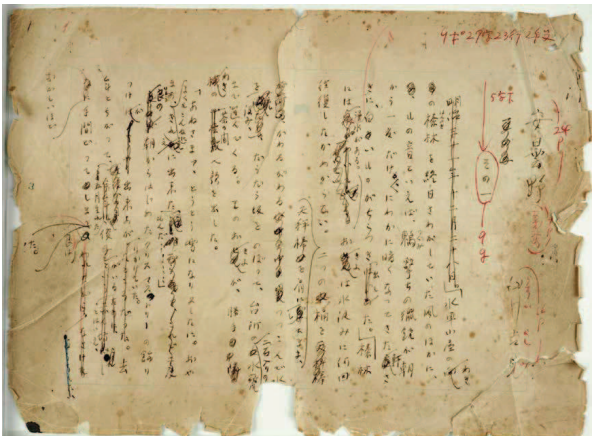
第一部 文学館収蔵資料

白井吉見文学館には、生原稿をはじめ、写真、書簡、身の回りの品、受賞記念品、著作など多くの収蔵資料が展示、保管されています。その一部を紹介します。

著作物

小説『安曇野』

安曇野出身の白井吉見が五九歳から十一年かけて完成した大河小説。相馬愛蔵、相馬良（黒光）、萩原守衛（碌山）、井口喜源治、木下尚江他をすべて実名で、明治から戦後までの日本の近代化を描きました。全五巻 文学館友の会発行の「常念とれんげ」に『安曇野』の執筆動機について書かれた文章を紹介します。



小説『安曇野』第一巻第一頁 生原稿

『安曇野』の主人公たち 萩原 守衛
(常念とれんげ平成三〇年五月一五日号より) 高原正文
碌山と白井吉見の大河小説『安曇野』との関わりは、相馬愛蔵・黒光夫妻、木下尚江、井口喜源治の四人同様、「キリスト教精神」の主人公で共通しますが、白井は碌山だけ明らかに別格視しています。一つはこの大河小説の執筆動機を碌山が直接もたらしたと、ひとつはもともと『安曇野』の遙か以前の戦時中に碌山に関する著作(評伝)を考えていたことがあります。しかし自身の明日が見えない応召などの事情でついに構想は立ち消えになってしまいます。

このようにいったん立ち消えになった碌山評伝への強い思いが、戦後になって昭和四〇年(一九六五)に思わぬ形で復活したのです。それが前者にまつわる体験だったのです。

実は昭和三七年(一九六二) 白井自身も、碌山がエジプトのカイロで見て感銘を受けたと同じ「村長」の木彫を見るという追体験をしました。それが、『安曇野』執筆の直接の「契機」となりました。五千年の時空を超えた「村長」の強い生命感と魂揺さぶる碌山の内なる「相克」を表現した傑作「文覚」への熱き連想が白井の背中をグイと押したと見られます。今度は「小説」という技法により碌山芸術の言及にとどまらず人間碌山の内面を抉り出したという思いに駆られたものでしょう。碌山の芸術と生とは一体のものであり渾然融合したものであったのです。また碌山と直接かかわりをもった安曇野ゆかりの四人の(前記)の重要な人物たちの動きも捉えることで、日本近代化の礎になった先駆者たちの苦闘を息長く描いた一種の社会小説として構想を広げました。

そのことは白井自身の文学者としての力量と取材領域が増大したことを意味します。編集者として『展望』等編集、新人作家発掘だけでなく、文芸評論家・社会評論家として『戦後』シリーズを完成させたからこそ進めた次のステップだったのです。



碌山「文覚」



村長像

雑誌『展望』

昭和二年一月筑摩書房は雑誌『展望』を創刊しました。文化・思想を重視し、各種論文を掲載し、中野重治、太宰治、大岡昇平らが小説を発表しました。白井は、評論「展望」を毎号掲載しました。

白井吉見著「蛙のうた」「隣は何をする人ぞ」より

まっさきに話題になったのは誌名だった。「麦」ってのははどうだろう。(風)はどうだ。(雲)は？」

立てつづけに、僕がこんなことを言い出すと、「そりゃ、同人雑誌だよ。」「そういっただろうと思った。だが(改造)とか(創造)とか(解放)とか、あの手のものは、ごめんだぜ。それに、臍を決したみたいなのはまっぴらだ。(風)や(雲)がいけないにしても、あたりまえの、さっぱりしたに決めてもらいたいナ。」

「ほんもの」はどうだ。「だれかがそんな口をはさんだ。」「僕らがやるんだから、ほんものにきまっている。ううだけ野暮だよ。」

「じゃあっさり(文化)と行くか。」中村光夫だった。

「(テンボー)はどうだ。見晴らしさ。」これは唐木順三。

「展望?それがいい、それにきめようじゃないか。」たちまち、付和雷同したのは僕だった。

さて、どんな雑誌をつくったのか?性格は?基本方針は?

「基本方針もあるものか。自分のつくりたい雑誌、自分の読みたい雑誌をつくりゃいいんだ。ひとさまのことなんか考えていられるものか。」

こういう重大な基本方針を最初に主張したのはだれだったか、どうにも思い出すことができない。僕のようにも思うし、唐木順三のようにも思う。

中村光夫かもしれない。いまとなつては、めいめい、自分が言い出したように思っているかも知れない。とにかく、この基本方針にだれひとり異議はなかった。

小説『獅子座』

六九歳で小説『安曇野』を完成させた白井吉見は、続いて明治維新を出发点とした近代日本の成立過程を丸ごと捉え直そうと『獅子座』に取り組みました。七六歳の時病に倒れ、第六部まで予定していましたが第二部までの未完に終わりました。

獅子座 第二部 下巻 あとがき より

『獅子座』第一部は、「賀茂行幸のこと」と題して、上下二巻をあて、つづく第二部「王政復古のこと」には、上、中、下の三巻をあてた。本巻は、第二部の第三巻であつて、これをもって、いわゆる「王政復古」のてんまつを叙し終えたことになる。

「王政復古」が「明治維新」として、結実するには、さらに幾山河を超えなくてはならないが、ここで一応、中幕がおりたものとみることもできようか。作者としては、『獅子座』全体のもくろみを展望して、これまでの五巻によつて、第一期完結のもりである。

本巻は、第十四代將軍家茂が、大阪城で陣没のあとを継いだ新將軍慶喜が、追いつめられて、窮余の打開策として、大政返上を申し出たにもかかわらず、まんまと、「王政復古の大号令」に出しぬかれたまでのいきさつを描いたもの。すかしく、いなしく、おどしおどし、かけき政治は、慶喜のお家芸であるが、どたん場、岩倉に裏をかかれ、自分がおめおめ、その手を食らわされたわけである。

多くの人物が登場するが、とりわけ重要なのは、孝明天皇、中川宮朝彦親王、岩倉具視、徳川慶喜、大久保一蔵、坂本竜馬の六人である。この六人像の描出に作者は精を出した。

「白井吉見さんから学ぶこと」

平成五年九月八日開催の中島博昭氏講演会を聴講した、平倉勝美さんの寄稿文(白井吉見友の会「常念とれんげ」平成五年一月一日発行第二六号から抜粋)

太宰治著「人間失格」が筑摩書房の雑誌『展望』昭和三年六月号に掲載され、さらに単行本が昭和三年七月二五日筑摩書房から発行されました。以下はそこに書かれた白井吉見の「あとがき」です。

あとがき

『人間失格』は、三月八日にとりかかって、五月十一日にかきおえている。構想がうかんだのは、昨年のおわりであり、この作品にかけようとする作者の情熱は、はげしく、これを裏きろうとする肉体の衰えは、はたの眼にも、はっきり見えてきていたところであった。そして、そのころには、この作者は自分にあたえられている自然のいのちの残りの部分が、はつきり意識されてきており、同時に異様な決意が徐々に熟しつつあったのではないかと思われるふしがあった。作者は、この作品で、今まで女ばかりかいてきたが、今度は男をかく、ネガティブのドン・ファンをかきたいと言っていた。ともかく、この作品は、作者が自身の文学の最高のかたちでかきあげた遺書であり、自画像である。

『グット・バイ』は、七月のはじめから朝日新聞に連載の予定で、『人間失格』がおわるとすぐはじめられたが、第十三回分だけで、未完のまま絶筆になった。作者の死は六月十三日深更である。

昭和二十三年七月十日
白井 吉見



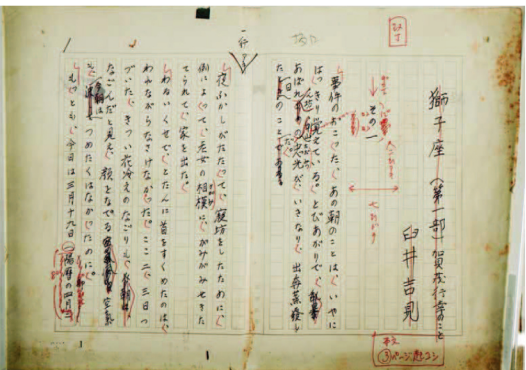
雑誌「展望」(1948年6月号)掲載の「人間失格」第1回最初のパージ

雑誌「展望」創刊号

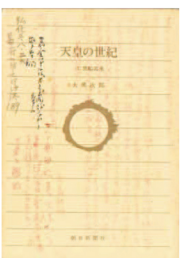
白井さんは、法蔵寺で七十人程集まった「安曇文学講座」にも出席され、そこでこれから書こうとしているもの『青年』の内容などを、熱く話された。

白井さんは、藤村の『夜明け前』にも武居用拙が出てくるが、名前だけ。何故自由国民運動など、用拙をもっと積み上げ検証しなかったのかといつていた。明治三十年以後のことは『安曇野』に書いてあるのでこれから自分はそれより前の明治維新からの天皇のあり方を書きたい。

『青年』は『獅子座』に名前を変えた。普通名詞はいやだと思ひ、獅子座にしたとのこと。白井さんは後に病と闘いながらも、王政復古から国会開設までのことを書こうとしていた。残念ながら成就できなかった。昭和六年八二歳で亡くなった。



小説『獅子座』第一巻上第一頁 生原稿



文庫本「天徳の世紀」表紙に書かれた白井吉見のメモ

書簡

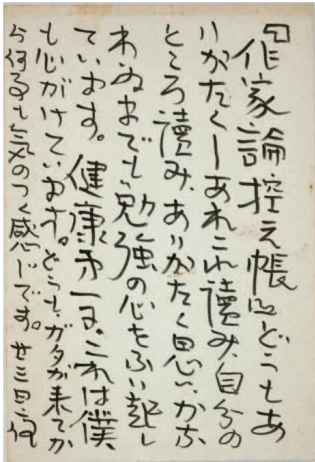
臼井吉見は、「人間の根本の追求は、芸術の世界が発する出会いと対話であり、それが無いと人間は生きていけない」と語っています。文壇関係者以外の人々も含め、様々な出会いと対話を書簡を通じて提供しています。また、『安曇野』では、登場人物により、出会いと対話の場が準備され、人間の根本に迫っています。書簡の内容も相手も多岐にわたっています。その一部を紹介します。

三浦綾子氏より

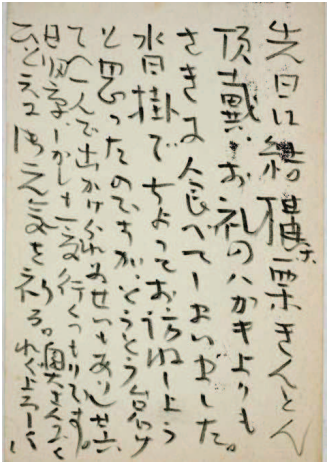


『水点』が海外でも出版されることになったことへのお礼や『続水点』についての相談。栗ようかんを頂いたことも記されています。(昭和45年8月6日)

中野重治氏より

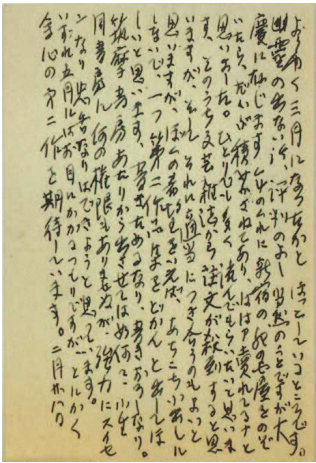


『作家控え帳』（筑摩書房 1977年）掲載についてのお礼と今後の作家活動への思いが記されています。(昭和52年5月23日) 中野重治は、『安曇野』にも幾度となく登場しています。



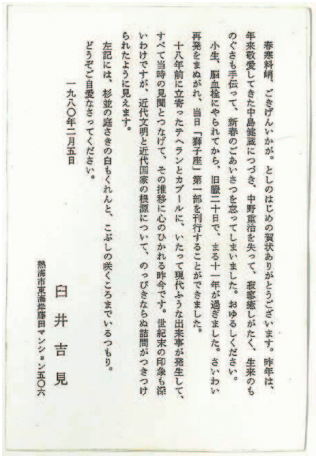
栗さんとんを頂いたことへのお礼。(昭和52年9月4日)

藤岡改造氏宛



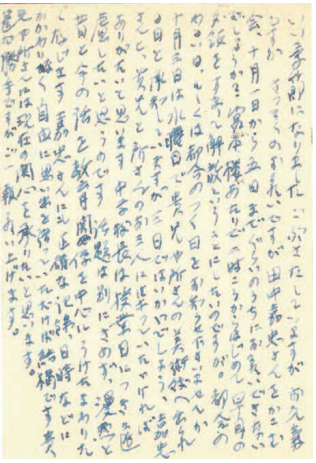
藤岡改造は作家、俳人であり松本中学校時代より、俳句に親んでいました。松本深志高校で国語教師を勤めました。臼井吉見とは親交が深く、作品について高く評価しています。『新宿のファースト』『職員会議に出た犬・クロ』『幽霊のでない話』等著書多数。(昭和55年2月28日)

岩波優氏宛



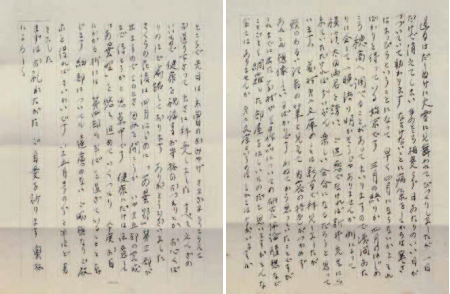
岩波優は軍隊時代の部下、戦後も親交を深め、近況を伝えあっていました。(昭和55年2月5日)

横澤正彦氏宛



横澤正彦は碓山研究者で、碓山館建設の中心的役割を果たしました。臼井吉見とは四十数年にわたる親交を深め、『安曇野』執筆にあたり、よく相談しています。二代目の碓山館館長を務めました。(昭和48年8月12日)

松原常雄氏宛



松原常雄は元教員で、島崎藤村記念館の館長を勤めました。松原に『安曇野』執筆にあたり、話を聞いています。木曾の土産「さくら花漬」のお礼と食べるタイミングを考えている様子が記されています。(昭和47年2月20日)

ゆかりの品

展示室に展示されているゆかりの品々の中から、いくつかの由緒ある品及び特に格調高い文机について、その来歴を紹介します。

展示室に入ると、まず目に飛び込んでくる二つの絵がある。一つは鮮やかな山の絵であり、もう一つは大きな鯉の掛軸である。

山の絵は、山里寿男（東京芸大卒、山岳画家）の「常念岳の朝」で、白井が晩年、病気で倒れてから、故郷を偲んで見ていたとのことである。飾られていた場所が玄関または廊下と異なった記載が見受けられるが、今年展示室を見た長男の白井高瀬さんは「居間にあったと思う」と言っておられた。次に鯉の掛軸は小林勇の筆による。小林勇（岩波茂雄の女婿・駒ヶ根市出身）は、編集者、随筆家、画家であり岩波書店の会長であった。小林勇文集（全一一巻）が筑摩書房から出版されているので、白井とは個人的な交流があったのだろう。

展示室の隅には白井が原稿用紙に向かった机、いす、ペン、眼鏡（三つ）などが並んでいる。小上がりの畳の場所に立派な文机があるが、日



親友古田晃形見のかたくち（酒器）



山里寿男「常念岳の朝」



めがね



机と椅子

常はこの机といすを使用していた様である（白井高瀬氏談。その隣に展示されている眼鏡のフレームは武骨でありレンズはぶ厚い。ぶ厚いレンズのことを牛乳瓶の底のようだと形容されるが、まさにその通りで並の虫眼鏡の比ではないくらいに厚い。一度に目の中に入ってくる字数は新聞の見出しの大きさの三〜五字程だったかと思われる。白井は昭和四一年右目の白内障の手術を受け、二年後には左目を手術、脳血栓にもかかり執筆中の『安曇野』は四年間休んだ。昭和四七年、作家の山崎朋子は「白井吉見先生には、お目の悪いのに五〇〇枚近い原稿を読んでいただき…」と書いている。執筆に、評論に、大変苦勞していたことが偲ばれる。展示室には、このほか古田晃の形見の片口皿や、まるで竹久夢二の絵から抜け出たようだとと言われる婚約中のアヤ夫人の写真など興味の尽きない収蔵品の数々が並んでいます。



小林勇「鯉」（掛軸）

「文机の来歴」

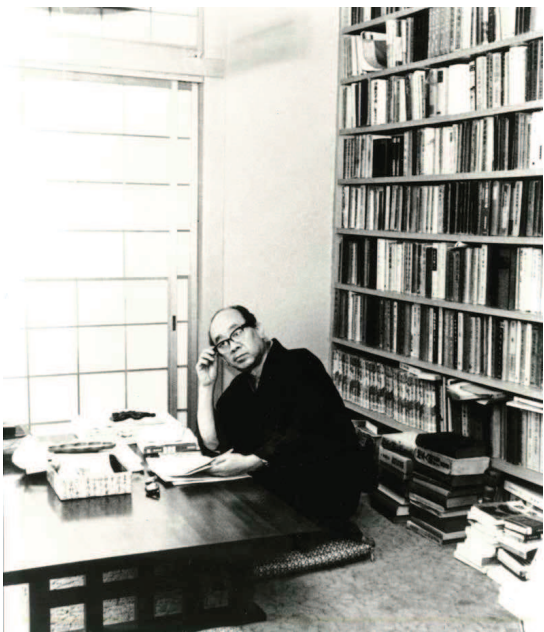
「昭和三十六年九月の第二室戸颯風で古田一族の墓地の五葉松が倒れた。これは樹齢何百年の巨木で、それで造った大きな座机を私は買った。現にその机に向ってこれを書いてある。厚さは一寸もあらう。手ざりはやはらかく、あたたかで、しぶく光つてゐる。」

〔「展望」昭和四九年一月号 唐木順三「古田晃に先立たれて」より〕
白井吉見文学館にある文机もこの松材で作られている。製作は、松本民芸家具の池田三四郎で、彼の著書『通俗民芸論』の「松の木の机―古田晃氏を偲んで―」によると、それは旧小野村の村長だった小野一良の話に始まる。

「実は古田晃が家を新築した時、色々の文芸家にお祝いを貰ったお返しとして、台風で倒れた樹齢五百年位の松の巨木があるが、それを材料として和机を幾つか作ってくれぬか。」依頼を受けた池田は「早速デザインを起こし、製材の上充分に人工乾燥を施してから加工したが、塗装は普通仕上げとせず、上質の漆で拭き漆を何回か掛けて完成した。」ところが「何台か送り出した後、小野村長が使いに来て、あの机の評判が良くない。第一、塗りが黒すぎた」と言う。池田は古田に宛てた手紙で「拭き漆を何回か掛けると、どうしても初めは黒すぎる。初めから調子を出した塗りでは、使っているうちに色が薄くなって本式の漆仕上にならない。」と、製作の意図を説明した。その古田に池田が初めて会ったのは、古田急逝の一年前であった。池田は、古田が『安曇野』に「戦後の松本平と柳宗悦の関係を書きたいという白井の希望」を



文机



書齋にて

語り、二時間に足りない僅かな時間の中で「話しは白井吉見の健康に關するものが多」かったと記している。白井、古田、唐木そして池田の諸々の思いを背景に、文机は今、上質の漆仕上の風格を醸して文学館に置かれている。常に時代と対峙し、書くべくことを追求しながら執筆した白井とその作品を見守ってきた文机は、まさにそれらの分身であるとも言い得るのではないだろうか。

《備考》冒頭の唐木順三の文章以外の引用は、池田三四郎著『通俗民芸論』（昭和五四年六月二〇日初版発行）中の「松の木の机―古田晃氏を偲んで―」に依っています。

（佐々木重昭・曾山 正子）

第二部 文学館のあゆみ

文学館開館（平成三年）まで

白井吉見講演から

一九七四年一月二三日 長野県南安曇教育会
 演題…危険なる同質性ほか

この講演はちくまぶつくす一九七九年三月発行「ちくま文庫一九八六年五月発行『自分をつくる』（六つの講演からなる講演集）のなかの「人生観はおしつけられない」に収められています。右でも左でもなく、全ての既成概念・固定観念を払拭して世の中を見ている。その根底に流れる吉見の非常に奥深い一貫した思想であると思えます。人生観というものは、当人が生涯かかってつくりあげるもの・教育者もそうだけれども、親といえども、自分の人生観を子どもにおしつけるべきではない。人生は出会いの連続であるが、時代と会い、事件と会い、書物と会い、思想とめぐり会う。すべてこの出会いというものが、それぞれの人生に何をもちたらずかということ、これは重大なこと。小説『安曇野』は出会いと対話ということ



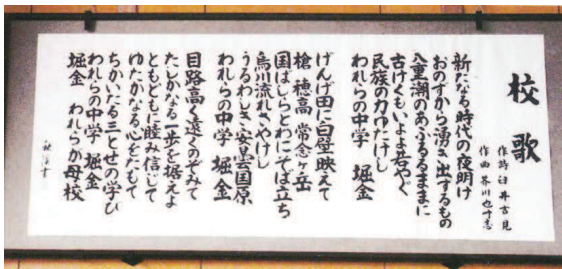
講演会の様子

書いたつもりと言っています。一番大きな問題は自分と異質な人間と対話すること。日本の社会はいたるところ同質性で埋まっています。同質者だけで社会をつくり同質者だけで話し合う。そんなものは対話ではない。そんな同質性は文明社会として非常に危険な条件だ。異質なものを取りこんで自分の歪みを正すことを忘れてはいけないと言っています。人生の目標は多様性を認め合いながら「自分をつくっていく」ことではないかとも思います。

白井吉見作詞 校歌について

昭和二十八年一月一日 待望の堀金中学校校歌の披露式が行なわれました。作詞は白井吉見、作曲は新進気鋭の芥川也寸志（当時二十八歳 東京芸術大学卒業後に日本を代表する作曲家の一人）で作られました。作曲を芥川先生にお願いしたところ「白井先生の詩なら喜んでお引き受けしよう」と快諾くださった。「崇高雄大な構想と新しい世紀に雄飛せんとする若き堀金中学生の理想を高く掲げたこの歌詞こそ堀金中学校の象徴であります」（堀金中学校資料）後に白井と芥川のコンビによる三校の校歌が作られています。昭和三十二年信大附属松本小学校、昭和三十八年平谷小・中学校、昭和四十四年島内小学校です。校歌は若き児童・生徒の心に確りと刻まれていくことを考えると偉業といえるのではないのでしょうか。

（白井 博通）



堀金中学校校歌

出版祝賀会・懇話会

『安曇野』五巻が完成した昭和四十九年五月、出版記念会がゆかりの新宿中村屋で行われました。出席者は井上靖、井伏鱒二、中野好夫、中野重治、丹羽文雄、有吉佐和子などそうそうたるメンバーで、司会は白井吉見の意向で吉村昭氏が務めました。大きな長方形のテーブルを取り囲む形で坐り、主賓の隣は前年に亡くなった古田晁氏のために空席のままでした。『安曇野』の完成をどうしても古田氏と祝いたかった白井の気持ちの表れであり、二人の友情の深さが感じられるものでありました。出席者の文学的香気と美しい友情に包まれたスピーチが続き、白井の手柄そのままのあたたかい、飾り気のない記念会でした。

同年一月二三日には、郷里の堀金村で『安曇野』完成を祝う会が盛大に開催されました。教育委員会が主となり、公民館、同級生の協力を得て堀金村文化祭に併せ、堀金小学校体育館で行われました。第一巻が



「谷崎潤一郎賞」受賞会にて



『安曇野』第10回谷崎潤一郎賞受賞



小学校同級生と堀金中学校にて

昭和四〇年に出版されてから、重大な難病に冒され心配されましたが、見事克服され不朽の作品『安曇野』が生まれたことは出身村として大きな喜びであり誇りでありました。小平公民館長の司会で、白井吉見作詞の堀金中学校校歌を聴き、主催者の唐沢委員長をはじめ各代表が祝辞を述べ、記念品を贈りました。白井吉見の記念講演は、太い力強い声で一時間四〇分を超え、感銘深いものでした。引き続き懇親会が開かれ、お祝いスピーチなど白井を囲んで賑やかなひとときが過ぎました。短日の中で暮れ迫る夕べ、『安曇野』第五巻の最後に出て来る「信濃の国」を全員で斉唱し、村長の音頭で万歳三唱をして祝いの宴を閉じました。その後、白井吉見は昭和六十二年七月二日に亡くなり、同年九月二四日、東京において井上靖等が発起人となり、「白井吉見を偲ぶ会」が開催されました。出生地である堀金村村長にもお招きの書状が届けられました。この会は、当代日本の文壇を背負って立たれる文筆家や、筑摩書房、中村屋などゆかりのある方々一〇〇余名の列席する大盛況の会であ



開館当時の文学館外観



開館当時の展示室

計画から竣工まで
文学館建設のきっかけは、平成元（一九八九）年九月の堀金村議会で猿田國夫村長の答弁から伺えます。その概要は次のようなものです。「臼井先生が」くなられまして、昭和六二年の九月、東京で徳ぶ会が催されました。筑摩書房さんが中心になって始めたんですが、筑摩書房の高橋さんと相談した経過があります。その他に二人おりました。観光の一環として使われることが多い『記念館』というより、臼井さんのこと

なく、文庫の方が適切ではないかと言われております。中学校の正門の西側に空き地がございます。中学校の校歌の作詞もされた方でもございます。一番臼井さんは郷里を偲んだということと、非常に静かな場所を好んだということ聞いております。勿論、常念岳も見えますので、そこへ建設をしてみたいということ、まだ具体的ではありませんが、来年度にはこの場所に建設をしてみたいと考えております。建物は先程言われましたとおり、いわゆる土蔵作りということで計画を致しております。」



堀金小学校での祝賀会

りました。会場の雰囲気を感じ銘を深めた堀金村猿田國夫村長は、郷土の誇りとする臼井吉見を村民の責務として是非とも顕彰申し上げなくてはならないと強く決意されたのです。そして、平成元年九月の堀金村議会で、猿田國夫村長は臼井記念館について、以下（村議会議事録より抜粋）のように答弁しています。



祭壇



吉見自筆の「滾滾涖涖」の墓碑がある堀金臼井家の墓



八王子の墓

したいという猿田村長の強く熱い思いが伝わってきます。
(宮澤 純子)

について勉強する人が訪れる程度の『文庫』の方が非常に適切ではないかということ言われております。臼井さんは郷里を偲んだこと、非常に静かな場所を好んだことから、常念岳も見える、臼井さんが校歌を作詞をされた中学校の正門の西側の空き地に来年度は建設をしてみたい。建物は土蔵造りで建設を致したい。」

設計や館名の審議の経過を知る資料やそれに関わった方の証言を得ることはできませんでしたが、文学館建設の計画に関わった元館長の青柳安昭さんは、『信濃教育』一二六〇号平成三（一九九一）年一月号で次のように語っています。「文学館の白壁土蔵作りは、穀倉地帯安曇野に多く見られる建物で、堀金中学校の校歌二番歌詞にもこの『白壁』があり、吉見をふるさと安曇野に迎え入れるのにふさわしいと考えました。建物の外観は二階か中二階ですが、内部は一階構造なのは、広い空間を取り、収納展示物のために通気を考慮しています。松丸太の梁や桁の木組は古色をわざと現し農家風を表現しようとしたものです。研修室を設けたのは、臼井文学の勉強をしてみたいもの。館名を『臼井吉見文学館』とした理由もここにあります。」館内には、展示室（一部畳敷きの書齋）、収蔵庫、研修室、事務室が設けられました。

平成二（一九九〇）年一〇月、建設は北野建設株式会社が決まり、総工費は四三七七・五万円建設が始まりました。建設地一帯八〇〇平方メートルは、堀金村中央公園として整備されました。

(臼井 泰彦)

平成三年 文学館開館

記念講演

白井吉見先生と「青春の出会い」

明科高等学校長

細川 修

る態度によくあらわれている。
三、非常に人情家であり、ヒューマニストであった。「その人、ある出版社の肖像」に表れている。
四、人間関係を非常に大切にされた。特に堀金小学校時代の「常念校長」佐藤嘉市先生との出会い、松本中学校時代の古田晃、唐木順三とのつながり、出会いを大切にしていた。と話されました。

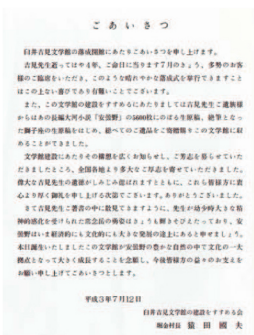
講演要旨

白井先生は、「出会い」「めぐり合い」「邂逅」を大切にされた。人生は出会いの連続であり、先生の心の中では常に「出会い」ということがウエイトを占めていたこと、著書の中から「三つの本」を例に、増田小夜の『芸者』青柳瑞穂の『ささやかな日本発掘』佐藤藤三郎の『二十五才になりました』の中にそれがよく現されている。と話された。

最後に白井先生の文学者、ジャーナリスト、教育者としての四つの特徴を著書や編集書を例に話された。

一、幅が広く、啓蒙的であり、新しさがあつた。時代を先取る意識があり、それが『安曇野』の構成にみられる。

二、努力家であり、まげずがいであつた。それが子供の教育に対する



堀金村公民館報 (平成3年8月1日)

落成式 (平成三年七月一二日)

待望の白井吉見文学館が四回目の命日にあたる七月一二日、落成式が堀金村総合体育館サブアリーナで行われました。

文学館は、吉見にとって精神面の成長と支えに一生大きな影響を与えた常念岳をバックに白壁の土蔵造りが冴える美しい建物です。白壁の土蔵・れんげ田・常念岳が一体となって自然豊かな安曇野に、新たな文化の拠点が生まれました。

式典には、堀金村関係者・ご遺族の皆さん・教育関係者・マスコミ出版関係者をはじめ福島双葉中学、伊那中学、松本女子師範学校の各教員など県内外の各界の人々二〇〇余名の皆さんが参加され、盛大に行われました。

落成式では、数々の遺品、生原稿などを寄贈していただいた遺族代表の白井高瀬氏に、猿田村長から感謝状と記念品が贈呈されました。

今後、文学館は、様々な文化活動の拠点となることを確信した式となりました。



開館テープカット



祝賀会 左:白井高瀬氏



祝賀会

平成四年から平成十六年

白井吉見文学館開館一周年記念

吉村昭先生・中島岑夫先生講演会

(堀金村公民館報 平成四年八月一日号より)

白井吉見文学館開館一周年記念講演会が、堀金村、教育委員会、公民館共催で(平成四年)七月二日(日)村総合体育館サブアリーナにおいて開催された。

中島氏は、大学卒業後筑摩書房に入社、そこで白井先生より数多くのことを学び、本当の意味での大学の勉強をさせていただいたとのことである。白井先生の思い出として、先生はものを書くことに対して厳しい目を持っておられ、耳で聞くだけでなく目で確かめ、人を簡単に信用せず、ちゃんと内面を理解して書いているかどうかと吟味され、よくしこかれたことや、先生はお酒が強く、飲むと陽気になり、歌を歌ったり、議論もよくしたことなど、またいびきのすいいには閉口したことなど、人間味のある面についても話された。

晩年におよんで長編小説『安曇野』五巻を病気を克服して完結された迫力に敬服したことや、その後執筆した『獅子座』が脳梗塞のため未完に終わって非常に残念であったと話され、中島氏にとって、白井先生は、人間としての生き方を一対一で教育していただいた偉大な師であると結んだ。



吉村昭 中島岑夫

吉村氏は、小説家というのは密室で書いていて果たして、どんな人達が読んでくれるだろうかといつも思いながら筆をすすめている。小説というものは、こちらから見せに行つて認めてもらうものではなく、ビール瓶に手紙を入れて海に流すようなもの、と思うようになったと話された。

後に『少女架刑』を出版する際に、推薦文を書いていただく依頼をしたところ、名作だとほめられ感激したことや、『星への旅』で太宰治賞を受賞した時の選考委員に白井先生もなつておられたことなど

白井吉見文学館開館三周年記念

柏原成光さん、山崎朋子さん講演会

(堀金村公民館報 平成六年八月一日号より)

最初に柏原専務が「白井吉見先生と筑摩書房」と題して約一時間話された。柏原さんは、現職の立場から、現在の出版界の実情をわかりやすく説明した後、草創期の筑摩書房や経営的危機などにふれながら、白井先生のすぐれた個性と見識がしばしば筑摩書房を救ったことなどを話された。白井先生の本物と偽物を見分ける鋭い勘は多くのすぐれた新人を発掘したし、『現代日本文学全集』全百巻の思い切った企画は、親友古田隼社長との決断と相まって大当たりした。最後の古田社長の法事に病床から寄せた手紙を読んだときは声をつまらせた。

山崎朋子さんは「私と白井吉見先生」と題して約一時間半。山崎さんと白井先生との御縁はあまり知られていないが、実はデビュー作ともいえる有名な『サンタカン八番娼館〜底辺女性史〜』が世に出たのは白井先生に負うている。この原稿をまとめたところが、どこの出版社からも断られたが、白井先生は、このとき目が悪いのに五百枚近い原稿を読み、即座に筑摩書房から出版することにしてくれた。この恩義は決して忘れることができない、という思いを語られ、さらに御自分の生い立ち、「物書き」の生活、夫である上笙一郎さんとの共同の文章を書くという仕事・海軍軍人であり潜水艦長であったお父様とのことなど、赤裸々に語る中で白井先生こそ自分の本当の先生であるので、自分を「先生」と呼んでくれるな、ということであった。



右：柏原成光 左：山崎朋子

著者と編集者、出版社の内実と人間的つながりを語られ、文学館開館記念にふさわしい講演会であった。二人の講師はそのあと文学館、白井家のお墓、実家に立ち寄り帰京した。

先生とのかかりについて語った。

吉村氏は私にとつての恩師は、白井先生と思いつついる。

白井吉見文学館開館二周年記念

藤岡 筑郎先生・増澤フユミさん・白井久雄さん対談

(堀金村公民館報 平成五年八月一日号より)

第一部として、藤岡さんが「白井吉見さんのこと」と題して講演された。

教育者・編集者・文芸評論家、国文学者、国語学者、社会評論家、文芸評論家として小説家として、広い視野を持ったスケールの大きな人であった。今日の政治情勢や世相を白井さんが健在ならば、どのように切り込むであろうか。また白井さんは率直な人で、いかにも堀金出身らしく、都会的な洗練されたところはなかった。終生故郷を愛した白井さんの文学館がここ堀金の地に建つたのは当然で、その地に生まれただけで観光目当てで建てられた施設とはわけがちがう。白井さんが亡くなった六年、白井さんから学ばねばならないことは多い、と結ばれた。

第二部は、藤岡さんが話のひき出し役で、増澤フユミさん、白井久雄さんから交々思ひ出話をしていただきました。非常によく勉強され、机に向かって父のうしろ姿がいつもあった。子どものことはいっさい干渉しなかった。非常に強そうだったが気の小さいところもあった、などなど。特にお母さん(あや夫人)についてお嫁入り道具の中に文学全集があったこと。



左から藤岡筑郎、増澤フユミ、白井久雄

見合い結婚だとはかり思っていたが、両親が亡くなってから、恋愛結婚だとフユミは聞いて、死後にわかったことが、悲しくてはげしく泣いたこと(久雄さん談)最後に、フユミさんは、父は言いたいことを言い、書きたいことを書き、生きたいように生きて、こんな立派な文学館まで建てていただいていた、と結ばれた。藤岡先生の名司会と合わせて、感動的な鼎談であった。

白井吉見文学館開館五周年記念

堀井正子さん講演会

(堀金村公民館報 平成八年八月一日号より)

白井吉見文学館開館五周年を記念し、平成八年七月六日(土)村総合体育館サブアリーナで講演会を開いた。ご子息白井高瀬さんもお見えになりあいさつされた。



堀井正子

講師の堀井正子先生(長野市在住)作家。文芸評論家は、一昨年常念岳に登つてみて、量感のある山と感じた。白井吉見はその「常念を見る」という佐藤校長の言葉聞いて育った。編集長、評論家であった彼がなぜ小説を書こうと思ったのかと、語り始めた。

曾野綾子の『太郎物語』や秀吉、光源氏を例に、人の心は見えないように見えない。親の心、子の心がわかり、時代、地域を越えて、見える言葉で書いてくれるのが小説である。

『安曇野』は、相馬愛蔵、良(黒光)を軸に、知らない世間や空問と、明治時代の青年たちの生き方、人生観、男女の世界等当時のままに書いている。当時のままに残す事が出来るのが小説であると、その素晴らしさを語った。作者は自分を育てた地域の人々を通して、自分のルーツとしての安曇野を探り、新宿中村屋を舞台に書きたいと思ったが、機会がなかった。旅先のエジプトの博物館で「村長」の像の前に立った時、碌山と同じショックを受けた事が執筆の動機となったという。

『安曇野』は読みやすい部分と、読みにくい部分がある。小説はなんでも盛り込め登場人物、場面を書き方を変えることができるからである。小説を読む時その人脈系図を書いて読むと、読みやすく小説も面白くなる。安曇平で文化と歴史を育てたい。そして残したい。それを開花させたいと「禁酒会」を設立した相馬愛蔵、井口喜源治、荻原守衛、木下尚江、それを陰で支える相馬安兵衛、白井喜代らの安曇野に生きる姿を調べ、大河のごとく書いた群像小説である。安曇野ではあるが、日本を見渡す事ができる、日本の歴史大河小説である。

白井吉見文学館記念講演会

筑摩書房の三人 小林俊樹先生

(堀金村公民館報 平成九年七月一日号より)

平成九年六月二八日(土) 白井吉見文学館記念講演会が、総合体育館サプアリーナで開催されました。今年度は、『深志百年・深志人物史』で白井吉見を担当した小林俊樹先生を迎えての講演会となりました。

講演会の中で、白井吉見、古田晁、唐木順三の三人について、その関係と生涯を細かにお話しいただきました。この三人は唐木順三が一年先輩にあたり、おそらく旧制松本中学校時代には、唐木は白井と古田のこととは知らなかったであろう。古田晁の死後七年後に唐木順三、一四年後に白井吉見が亡くなっている。白井吉見の墓碑銘で、彼の座右の銘でもある「滾々泪々」は、こんこんいついつであり、物事のつきない様、思想や思考が絶えない様子をいつているが、こんこんこつこつとなると、波の音であり、沈みはるとか乱れるという意味で使われている。「滾々泪々」は白井の生き方の象徴である。唐木の死ぬ寸前の様子を白井は追悼記で書いている。そこには二つのこととして、唐木が退院後に通院する際の交通手段に悩んでいたこと、世話になった医者への謝礼のことで、何を送ればよいか悩んでいたことが記されている。白井がその悩みに答えてやると、唐木は安堵の色を浮かべたということである。

一方古田と白井の関係はまた違っており、筑摩書房が傾いたときは古田にとって白井は重荷になっていたように思われる。唐木よりもつきあいの古い二人はいい面も悪い面もよく知っており、古田の弱い面を白井は知りながらも、それを理解しようとはしなかった。古田は当初から白井に依存し、半面重荷になっていた。白井の企画力はとびぬけていて、白井の清さがなければ筑摩書房もなかったのではないだろうか。しかし、三人三様でありこの三人が戦後の日本の文学を担ったと結んだ。

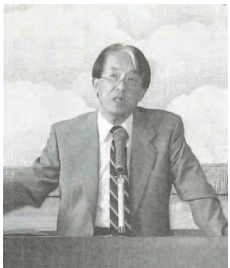


小林俊樹

ふるさと常念の里講座講演会

白井吉見と山田多賀市 中島博昭先生

(堀金村公民館報 平成二一年一月一日号より)



中島博昭

平成十一年九月三十日地域史研究家である中島博昭先生に、白井吉見と山田多賀市の世界を対比しながら、講演いただいた。

この内容について堀金 宮澤功一さんから寄稿いただいた。

語りつくぐことこそ

宮澤 功一

先ごろ開催された「ふるさと常念の里第六講座」は、奇しくも同じ文学の道に名を馳せた二人の出身が田尻区であり、同郷の私も中学生と一緒に聴講させていただいた。講師の中島先生が二人を比較して分かり易く話をされたので、その人物像を理解することができた。

ともに農家に生まれて、明治から昭和の年代を人との出会いによって人情の機微を語り、雑誌の編集を行い作家の道を歩んだ二人。しかし二人には生い立ちから決定的な違いがあった。どん底からはい上がり、反骨精神みなぎる土においがする農民作家と、片や超エリートコースをたどり教育者、評論家、国文学者等多様な顔をもつ作家という違いである。

多賀市さんは各地の瓦焼き工場を回り職人としての仁義の社会を学び、戦争や地主小作制度に反対して農民運動を興し、そのため何度か囚われの身となった。芥川賞候補にもなった作品が、反戦的だということを取り調べを受けた。

吉見さんは小学校時代に常念校長の異名をとる佐藤校長先生から大きな影響を受け、常念岳の姿を見てその美しさを感じることで、正しいこと、本当のことを知り自分自身の精神の世界を学んだ。友人とともに雑誌の編集にあたり、自らも広い視野で創作の筆をとり、また多くの作家を育てた。

郷土が生んだ偉大な二人の業績を今後とも語り継いでいくことを望みたい。

ふるさと常念の里講座講演会

安曇野に生きた白井吉見の世界 小宮山量平先生

(堀金村公民館報 平成十年一月一日号より)



小宮山量平

総合講座「ふるさと常念の里第四講座を平成十年九月二九日(土)総合体育館サプアリーナで開催した。

今回は一般はもちろん中学校の全生徒と全職員の参加を得て、「安曇野に生きた白井吉見の世界」と題して講演していただいた。

戦後日本を代表する出版人は四人。その中の一人として白井吉見がいる。日本人の自立精神と美意識を高く評価して生み出した雑誌『展望』の編集長としてすばらしい力を発揮された。日本文化史に残る人々を世に送りだし、新しいヒューマニズムを世に問いながら、秩序の感覚なくして、戦後の自由・平等における縦や横の関係は考えられない。ふるさとを起点として、秩序の中に統一していくことがどんなにか大事である。

「同じ郷土に住むみなさんが、編集者として白井吉見を知らなくて素通りしてしまうような村であったり、学校であったら、文化なんてありはしない」と力を込めて話された。そのこととあわせ大変に感銘深く聞かせてもらった。

さらに多くの課題もいただいた。白井吉見文学館には、文学者としての生涯をたどれるものがあるが、日本文化の中で編集者としての大事な役割のあかしとなる全集がない。『現代日本文学全集』『現代教養全集』『明治文学全集』は、ぜひ揃えたい。また、今この店頭にも見当たらない白井吉見の随筆集を備えたい。『自分をつくる』と同じポケット版で、文学館で手に入るものとして『どんぐりのへた』『わが安曇野』『人間と文学』『戦後という時代』をあげられた。

具体的な提案をされながら、近代化のふるさとである白井吉見のふるさとに住む自分に誇りをもって欲しいと締めくくられた。

ふるさと常念の里講座 座談会

ふだん着の白井吉見

(堀金村公民館報 平成二六年七月一日号より)

白井吉見生誕百年・『安曇野』出版三十周年記念行事、「ふるさと常念の里講座・吉見を見つめて」の第一講座が、実行委員会を中心として平成十六年六月十七日(木)午後七時三十分より役場大会議室で開かれた。

吉見に縁のある方々をお招きし「普段着の白井吉見」と題した座談会には、村外遠くは北九州市から約百二十人の受講者が集まり吉見にまつわる思い出話を耳を傾け、その人柄の魅力に触れた。

パネラーは、吉見の長女の島村ハルミさん、次女の増沢フユミさん、三女の熊瀬ユキミさん、甥の白井久雄さん、田尻生家の義姪白井正子さん、元堀金小学校校長の内田昭三さんが、また進行役を『安曇野』読む会代表の橋渡良知さんが務めた。

ハルミさんは、学生時代に数学を教わった時のことを振り返り「お父さんがこんなにも難しいもの(試験に)出るわけがないと言っただけだ」と問題、私が思った通り出たわよ」というと「お前には予知能力がある。学校の勉強などよして占い師になったらどうか」と言われたというエピソードを披露し、フユミさんは、「父は本当に家庭を大事にする人で、家族の誕生日や旅行などよい思い出がたくさんある」とよき家庭人であった。義姪の正子さんは、「吉見叔父がいつもここはいいなあと言っていた故郷の風景は、まさに中学校の校歌(吉見作詞)そのもの」そして「いくつになっても子供のような人」とその純粋な人柄を思い起こした。また教育者としての吉見を知る内田さんは「白井先生は、今の教育は、健康な子どもに病院食を与えているようなもの。自分の力がかみ砕き、自分の足で立つ人間が育たない」と厳しい口調で話されたと述べた。



「ふだん着の吉見」を語る親族の皆さん

平成一六・一七年 生誕百周年
— 四つの講演会と一つの旅 —

一、「ふだん着の白井吉見」(平成一六年六月一七日)
パネラーは白井家の三姉妹と三人の関係者、司会を橋渡良知氏がするというシンポジウムが座談会形式で行なわれました。参加者は地域の人よりもより多くの教え子が参加し中に吉見の初任地である双葉中の教え子が九州から参加してくれるという会でした。姉妹からは父が一番優れていたのは教師。二番が編集者。三番が評論家。四番目が作家だと話されたのも会場の参加者を見ると実証されているようでした。

二、小説『安曇野』の今を訪ねて(平成一六年一〇月一六日)
講師は永沼孝致、望月武夫、赤羽康男の三氏が当たりました。堀金・穂高地区で『安曇野』に出てくる主な場所を訪ねました。吉見の生家や墓地、研成義塾跡や井口記念館、碌山の生家や美術館、相馬家など現在に残る地や物を見ました。参加した人々は白井が『安曇野』を書いてくれたおかげでこうして見て廻れることと改めて安曇野の素晴らしさに気付かせてもらったこと、住みながら故郷を知らない自分に気付いたことに改めて感謝しました。



シンポジウム「ふだん着の白井吉見」の記事

三、白井吉見と筑摩書房——後輩編集者は語る——(平成一六年二月二日)
講師は松田哲夫さん

「自分を編集者に育ててくれた恩師です。人の話をよく聞き新人を育てたいという思いと包容力、人柄が素晴らしい人でした。筑摩書房の危機を何回も救っています。それは皆が無理だといって文学全集の出版でした。「文学全集の筑摩」のブランドを一人で作り上げたのです。私はその波の後でしたが新しい身近な全集をと考えていくつかの文庫版の全集をだしました。白井さんが生きておられたらたぶん悦んでくれたり励ましていただけたのではないかと思います。これからも出版文化を引き継いでいきたい。」

四、取材中の安曇野と白井吉見(平成一七年三月一五日)
講師は赤羽康男さん
新聞記者の立場で『安曇野』に書かれている人々やその地域のその後を取材し、現在の社会と重ねて話されました。内容は濃かった。足尾銅山の公害と田中正造の戦い。木下尚江の社会に対する姿勢。天皇の戦争責任について司馬遼太郎と白井の見解の違い。邂逅の小説『安曇野』の元になった守衛と良との出会いなど現代の姿にからめて話されました。

五、文学者・編集者としての吉見(平成一七年六月一八日)
講師は三浦朱門さん
奥様は曽根綾子さんと白井さんの紹介で結婚された一組です。「白井さんは編集者としての必須の能力の持ち主で人の本質、作品の本質を見抜く目を持っていました。後に大きくなる作家を拾い上げて育てています。もう一つは無類の郷土愛の持ち主でいつも方言丸出しで話し、『安曇野』は故郷の多くの人々を取り上げていますが表現に暖かさがあります。」

そして一人として貶めていません。故郷で始まって最後は故郷に戻ってきています。故郷には文学があります。」

(小平 信夫)

市民タイムス 平成一七年六月(日) 10.18(月)(日)

『安曇野』の心に迫る

白井吉見生誕100年 小説出版30年記念
ゆかりの地巡る旅

白井吉見生誕百年記念の研修旅行「小説『安曇野』の今を訪ねて」(平成一六年一〇月一六日)

平成一七年七月一日 堀金村公民館報 第468号

吉見記念事業最後を飾る
三浦朱門氏講演会に300人

文学者・編集者としての吉見

講演する三浦朱門氏

熱心に講演を聴く皆さん

堀金村50年の思い

指定管理者スタート

平成一五(二〇〇三)年「公の施設」の管理運営の民営化を可能とする地方自治法が改正されました。これにより白井吉見文学館は、平成一八年九月より安曇野市の直営から、市民任意団体「安曇野地域住民ネットワーク」による指定管理者に移行することとなりました。

住民と行政との協働のまちづくりを目指す住民組織が文化施設の指定管理者に選定されたことは、全国的にも珍しく注目されました。指定管理者に応募した動機と目的は、左記のとおりです。

白井吉見文学館申請にあたって

安曇野地域住民ネットワーク 代表 渡辺 修

田園都市「安曇野市」は、田・畑・屋敷林、さらに岳と水と緑に代表される自然があり、さわやかな空気が充滿しており、信州長野県を中心にあって、田園都市を象徴的に表していると考えられています。

そのなかにあつて、先人の作り上げてきた歴史のなかの文化は、安曇野に深く根付き、地域指導者を生み育ててきました。尊敬する偉業を、白井吉見は「安曇野」という大河小説に結実させ安曇野を広く世に紹介してくれました。今日の「安曇野市」の市名の由来もここにあると言っても過言ではありません。そこに住む私たちは、郷土安曇野に「白井吉見文学館」のあることを、誇りにおもっています。ところが、来館者が少ないと聞き、安曇野市に住む一人として、努力不足を強く感じたところです。

「安曇野地域住民ネットワーク」では、「白井吉見文学館」により強く光を当て、多くの人々にアピールをして、新しい文化の発信地になるように、力を尽くしたいと考えて、ここに指定管理者に応募致します。

友の会発足

白井吉見文学館友の会は、平成一九年二月一八日設立され、様々な活動をしてきました。

文学館の活動の基本は、資料の収集・研究・鑑賞・発表・保存・討議・評価を行いその循環過程で文化の向上を図り、地域づくりを行うことです。こうした活動を行うためには、予算と人材不足が大きく、事業計画の大部分が実行困難なため、白井吉見文学館の活動を応援しようという会が設立されました。

初代友の会会長には、米倉 汎子(ひろこ)さんを選出しました。

友の会では次の五項目を目的に活動することになりました。

- ① 多様に富む様々な会員を中心にネットワークをつくり、白井吉見を多面的に検証しその中で知識・研究成果の蓄積と継承。
- ② 会員相互のコミュニケーションの場を提供。
- ③ 文学館の管理運営への参加。
- ④ 文学館の諸活動を協働の下で支える。
- ⑤ 文学による地域づくりを目指し、文学館の存在価値を高めること。
- ⑥ 会の透明性を確保し、民主的運営を行う。

友の会設立総会時で会員は一六〇名でスタートし、その後二三〇名になりました。友の会の定期刊物として「常念とれんげ」友の会だよりを年三〜四回発行し、会員向けの単なる情報誌ではなく様々な意見や感想・研究成果の発表と交流の場を広く提供することを目指すこととしました。「友の会」だより第一号は、平成一九年六月一日、白井吉見文学館「常念とれんげ」(題字 橋渡良知氏)として発行され、令和三年五月二七日発行で、第五四号になります。

友の会は、文学館の事業活動を協働の要と位置づけ、行政・他団体・個人・出版社・マスコミなどの連携とネットワーク化の主要な構成員となりました。

友の会設立記念講演会講師に、『中央公論』元編集長 粕谷一希さん

平成二六年四月より指定管理者は、安曇野地域住民ネットワークから市民任意団体「ほたるぶくろの会」へ交代しました。指定管理者としての文学館の運営は、文学により地域の人々が交流し結び付くことにより人間関係を豊かにし、そこから地域独自の考えや物事を生み出していく力を身に付けることを目指してきました。

白井吉見文学館友の会を発足させ、文学館の事業活動を協働して行ってきました。具体的には、年間二から三回の講演会、各種読書会、研修旅行、書籍の発行、資料の収集、文学の研究・発表、学校など各方面へのアウトリーチ活動、運営成果の広報活動等を行ってきました。

白井吉見文学館の管理 安曇野ネットに委託

行政が運営していた文化施設「白井吉見文学館」の管理を、市民任意団体「安曇野地域住民ネットワーク」に委託する。市は、民間企業や市民団体に委託する民間委託方式を採用する。委託期間は、平成一九年四月一日から平成二〇年三月三十一日まで、二年間である。委託料は、年々減少していく見込みである。委託料は、年々減少していく見込みである。委託料は、年々減少していく見込みである。

市や他の委託先で、文芸的・学術的・教育的な活動を推進し、市民の文化意識を高め、地域活性化に貢献することを目的としている。委託料は、年々減少していく見込みである。委託料は、年々減少していく見込みである。委託料は、年々減少していく見込みである。

白井吉見文学館友の会(前右から)渡辺さん、内川さん(後列右から)細萱さん、小口さん

市民タイムス 平成 18年 8月 29日

をお招きし、「真の言葉は書物から」との演題で、お話をさせて頂きました。その中で「真の言葉、文章は書物からしか得られません...書物への愛情は深いものです。書物への愛着は人間への愛着でもあります。」と、強調されました。

記念講演は、友の会設立総会にふさわしい講演となりました。(渡辺 修・細萱 美嗣)

「友の会」設立記念講演会から 真の言葉は書物から

粕谷一希さん

白井吉見文学館 友の会

常念とれんげ

力を含ませて

米倉 汎子

白井吉見文学館 友の会

常念とれんげ

力を含ませて

米倉 汎子

白井吉見文学館 友の会

常念とれんげ

力を含ませて

米倉 汎子

双葉町支援チャリティーコンサート

白井吉見が教師として初めて赴任した旧制福島県双葉中学校（現双葉高等学校）のある双葉町は、平成二三（二〇一一）年三月一日東日本大震災と福島第一原発事故が重なり大きな被害を受けました。同年一〇月九日（日）安曇野市「穂高交流学習センターみらい」でさっそく、チャリティーコンサートを開きました。当日は、満席のお客様を迎え、市内合唱団七団体と詩吟一団体による感動に満ちたコンサートになりました。募った義援金二万七千九百四円は、心を込めて双葉町に送りました。

教師として初任地双葉中学校では、新妻とともに四年間生活しました。白井吉見文学館建設にあたり当時の教え子と町関係者からは、多大な資金支援や資料提供を頂きました。双葉町全住民の早期帰還を強く願っています。

（平倉 勝美）

届く日に

内川 美徳

波間に揺れている一枚の写真
どの顔も微笑んでいる
そこでは冷たいだろう
腰をおろし 力を抜いて
ぐっと力を抜いて
嗚呼 手をのべても届かない
黒い海だ 日の昇らない山だ
声のしない街だ
牛も犬も猫もおろおろしている
家にも学校にも公園にも工場にも
放射能の雨が墜ちつづける

北極星は不動だ



企画展

初の企画展

平成二〇（二〇〇八）年一〇月二日〜十一月三〇日まで、『安曇野』に登場する人物の資料を中心に、初の企画展を開催しました。資料の数は数十点にのびりました。

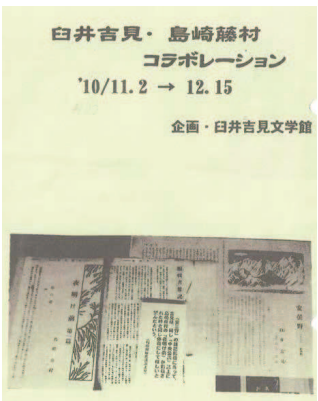
主な展示品は、白井吉見の書簡、昭和一八（一九四三）年代の色紙、終戦直後の評論生原稿、東大時代の同人雑誌、井口喜源治と内村鑑三の書簡、相馬愛蔵の養蚕研究ノート、木下尚江など初めて注目された資料が多くありました。



白井吉見・島崎藤村コラボレーション

平成二二（二〇一〇）年十一月二日〜二二年一月五日まで企画展、白井吉見・島崎藤村コラボレーションを開催しました。

白井吉見は、藤村記念館の元館長で教員であった松原常雄氏と交流し、藤村文学について研究を深めました。『安曇野』第一部その四、その一〇で良は、明治女学校の教師であった藤村と教え子との恋愛について嫌悪を



待ち望む方位（かなた）に煌めいている
安曇の里から響かせる合唱（うた）で
風をお興し緑の地を広げ
山を渡り河を超えて

安曇野から陸奥（みちのく）に
未来（あす）という日に想いをこめて
絆の路（みち）を三陸の沖に届けたい

福島県双葉町支援 合唱コンサート

日時 2011年10月9日（日）
開場 午後1時
開演 1時半

会場 穂高交流学習センター『みらい』

主催 白井吉見文学館

出演合唱団（出演順）
とよしな女声合唱団 合唱団ユリの木 安曇野合唱団
たまゆら歌の会 コール朝科 安曇野混声合唱団
小田多井コーラス 中宿塩尻岳風会安曇支部

後援 安曇野市 白井吉見文学館『友の会』 安曇野地域住民ネットワーク
信濃毎日新聞社 中日新聞社 松本平タウン情報 市民タイムス

抱いていました。

『若菜集』について良は「……形式にしる、調子にしる、……おもしろいとは思うけど、借りものの声のような気がしてならないの。」と語っています。後に詩集『なつくさ』が出版され、『若菜集』とくらべ変化が大きく良も認めています。

この企画展により、文学に対する理解が一段と深まりました。

長野県内同人雑誌展

平成二八（二〇一六）年一月二日〜二月一日に県内同人雑誌展を開催しました。白井吉見は少年時代（旧制松本中学校）同人雑誌『高嶺』を発行し、旧制伊那中学校教員時代に『鳩の巣』を発行し、作品の発表・批判・勉強の場を提供し自身も、才能をさらに伸ばしていきまし

た。県内の同人雑誌一七点（『佐久文学・火映』、『総合文化誌・ふきはら』、『総合文芸誌・安曇野文芸』、『自由律俳誌・青い地球』、『樹水』、『かおす』など）を展示しました。文芸、句、詩、歌などの誌は、文化的な価値が詰まっており作者の成長の過程が分かるものです。

このような展示会は、県内では初めての試みではないか、と思います。

多彩な同人雑誌魅力紹介

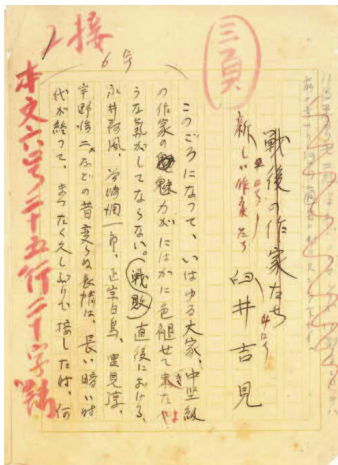
市民タイムス 平成28年11月2日

白井文学館で展示会

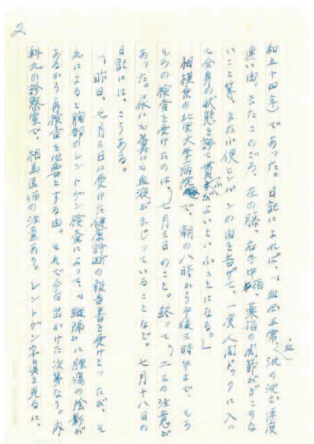
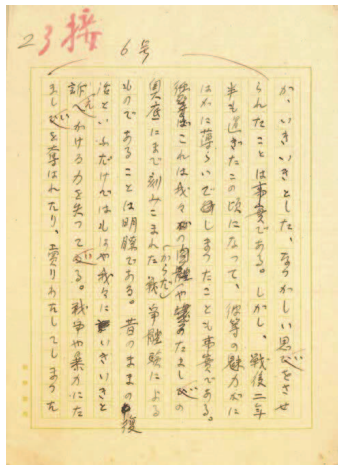
生原稿購入

文学館の活動の基本の一つとして、新たな文化価値や歴史的事実の発見に繋がる資料収集を始めました。新たな資料を求め、当地域を中心に白井吉見に関する原稿・書簡・講演録画等購入・寄贈・委託展示を求めた活動を行ってきました。

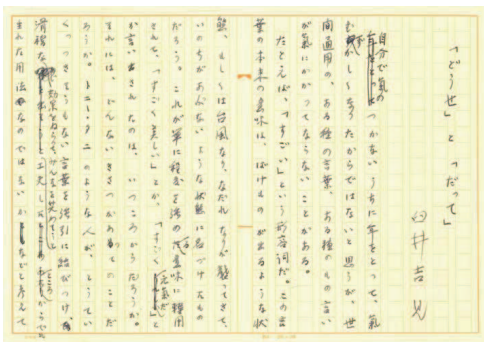
平成一九年（二〇〇七）三月に生原稿の存在情報が寄せられ、東京神



「新しい作家たち」の生原稿



「二つのこと」の生原稿



「どうせ」と「だって」の生原稿

田の古書籍店で購入することが出来ました。
・昭和二二年中頃執筆した「新しい作家たち」は、終戦前後の代表的な作家たちを論じた貴重な原稿です。

・唐木順三最後の心境について報告した「二つのこと」
・本来の日本語の意味と異なる言葉や言い方が通用されていることについて、批判的に論じた「どうせ」と「だって」

今後、地道な資料収集を行ってまいります。

本の出版

『白井吉見のあゆみ』

この冊子は、倉科平氏（宮浦真之介画）が『市民タイムス』に平成四（一九九二）年一月三日から三月五日まで三〇回連載された、松本平人物誌「白井吉見」を復刻編集したものです。

白井吉見の生涯について年代順にまとめた冊子です。平成一八（二〇〇六）年九月一日、安曇野地域住民ネットワークが指定管理者となった機会に発行したものです。白井吉見の概要を知るツールとして大変役に立ち、評判も良い小冊子となりました。



『自分をつくる』・『続 自分をつくる』

平成元（一九八九）年二月一五日第二刷発行の文庫版（初版は一九八六年）を基に、筑摩書房では絶版となっていた『自分をつくる』復刻版を平成二〇（二〇〇八）年十二月二十五日、発刊しました。文学館で印刷し、販売することを「体裁を変えること、販売は文学館のみで他の書店には出さない」との条件で新書版での発刊で著作権者の了解も得ました。引き続き平成二三（二〇一一）年一月『続自分をつくる』を発行しました。



中学生から大学生・勤労青少年・教育関係者に行った講演を収めた本です。

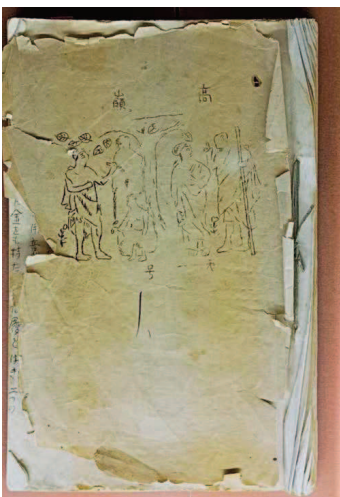
白井吉見があとがきで「国民の大勢に……わけても学校の先生たち、教育関係者、特に一人でも多くの母親に読んでいただけたらと念願しています。」と述べています。

中学の卒業生に記念として送ったり、大学のゼミ生にと五〇冊購入のために来館されたりと、多くの方々が購入しました。今日でも多くの示唆に満ちた教育者としての神髄がこの本に満ちています。

『高嶺』

平成三二（二〇一九）年白井吉見が少年時代（旧制松本中学三年生頃）村内一三人の同世代の人と発行した初めての作品集（同人雑誌）『高嶺』を発行しました。

ガリ版印刷の袋綴じで、用紙も劣化して判読も難しい箇所がありますが、活字することにより読みやすくなりました。短編小説、随筆、詩、短歌など豊富な作品に満ちています。



白井吉見少年時代のガリ版同人雑誌

平成三十一年・令和元年～令和三年

平成三十一年四月から文学館は、安曇野市の直営館となりました。来館者にはインターネットを利用する呼び出し対応となり、負担をかけることになりましたが、入館料は無料となりました。年二回の講演会や友の会の活動など、基本的には今までの活動が継続されています。この二年間に取り組んだ活動を紹介します。

コンパクト展示「白井吉見その人、その言葉」

文学館には年館、四〇〇人ほどの見学者がいますが、その六割は県外、二割は市外の人たちです。市内の人たちに広く白井吉見という人物を知ってもらう機会をつくろうと白井吉見の紹介展示（コンパクト展示「三本」）を製作しました。公共施設や学校、ほりでいゅ〜四季の郷などで展示を行いました。

オンライン動画

新型コロナウイルス感染症により閉館となったため、予防のため来館を控えたりした人たちのために、安曇野市ミュージアム活性化事業実行委員会の構成館として、オンライン動画を令和二年、三年と作成しました。

開館三〇周年記念企画

令和三年に、文学館開館三〇周年を迎えました。白井吉見の長男白井高瀬氏を招き、命日である七月二日に「父のあれこれ」と題して記念講演会を開催しました。



「白井吉見文学館」紹介動画 2020年



「学校ミュージアム」明科体育館 2019年



紙芝居「うすいよしみものがたり」

白井吉見は希望する人には快く色紙を書いたり、講演依頼も受けたりするなど相手意識の高い人柄でした。白井の出身地である堀金地区の方や友の会会員を中心に白井吉見に関係する資料についての調査を行いました。一五件の問い合わせがありました。内容については、四四ページを参照してください。

令和二年から地域資料調査員を中心に、文学館等に収蔵されている資料の整理や文学館の歩みなどをまとめる記念誌（調査結果報告書）刊行の準備を進めました。

他館や地域との連携

地域の方が製作された紙芝居「うすいよしみものがたり」の朗読会を文学館講演会に合わせて実施しました。また、安曇野市ミュージアム活性化事業実行委員会では市内の博物館や美術館との連携した出前講座「学校ミュージアム」を計画してきました。令和元年から三年までの間に、明科中学校、穂高東中学校、明南小学校、三郷小学校に出向きまし

こぼれ話

文学館のノートから

白井吉見文学館が開館して三〇年、白井吉見文学館には「来館者の言葉」と「視録」という、二冊のノートが保管されています。今回は、この中から二件掲載させていただきます。

高橋 徹

七月六日

「四季の会」二五名来館。松電のバスで来ました。全員女性。杖の方も三名程。九時丁度位に二人の女性。池田と豊科の方で「四季の会」の人です。私たちも含めて二五人ですとのこと。やはり、文学散歩の会で、色々の所を巡っているそうです。今日の予定は「白井吉見文学館」〈中萱加助義民館（貞享義民記念館）〉〈大王わさび農場〉近代美術館（日帰り）泊りもあるそうです。

以前に「白井吉見先生の講演会を聞きましたが難しく理解できなかった」と話された方がおりました。「れんげ忌」のパンフレットを持っていかれた人が多数おりました。ご都合つけば是非！と、女性のパワーです。

六月二十五日

八十八才の母親と三人の子供達で父親の生家のある入山辺を訪ね、その帰りにとのことで来館。碌山美術館を訪ね、長編小説『安曇野』を知ったとのこと。白井吉見については今まで全く知らなかったが、年譜に沿っての私のつたない説明に加え、雑談がとても興味深いと喜んで頂け、記念写真までおつきあいさせられ非常に恐縮。

遠く北海道から父親のルーツを訪ねこうして、わざわざ足を運んで頂き感謝の気持ちでいっぱい。人の出会いってすばらしいなって実感。常念岳がはつきり見えなくて、とても残念がっていました。



れんげ忌チラシ

ようこそ文学館へ

横山 温子

「今日はニコニコ来館者と接しよう。」「どんな人との出会いがあるかな？楽しみ。」そんな気持ちで一日のスタートです。来館者も地元から県内外。男女年齢もさまざま、割合からするとリタイヤしたご夫妻が一番多いかな。稀にお若い「カップル」も無条件にうれしい。文学館を知っている事、白井吉見の名前だけでも聞いたことがあり来館されたこと、日本の将来もこれで安心なんて少しおかげさまで考えてしまう。動機は親の本棚に「安曇野」があった事、どんな動機でも大歓迎です。

五〇代のご夫妻が来館、入口の来館者記入簿に「〇〇 吉見」と記帳、「あれ吉見と同名ですね」「はい、おやじが白井先生の大ファンでした。ね、男の子が生まれたら名前が吉見と、私は理系で本にはあまり興味が無かったのですが、一回は訪ねて見ようと来ました。」「筑摩書房の本は信用できると口癖のように言っていました。」「

東京のはとバスに乗って物産センターで二〇分の買物とトイレ休憩があり、一人の男性が飛び込んで来た。「手短かに説明して下さい。」「展覧の前で懐かしいと、『安曇野』の生原稿の前で立止まり、「先生はわかり易い字を書く人ですね」と顔を近づけて見ていられました。ほんの少しの時間でしたが来館できて良かったと、手を振って帰って行きました。

大町の男性より「安曇野」五部が欲しいとお電話あり、古本屋より取寄せた本があり、寒い日の五時近くに来館、八〇才過ぎの方が「冬、農家が暇になったので読もうと、今日から少しづつね」風呂敷を広げて大事そうに包んでニコニコしながら帰って行かれました。その後姿を見て何だか具体的にわかりませんが、私も負けてはいられない、少し若いんだから!!

たくさんの方とお話をして、自分の勉強不足に恥をかいたり、それでも「ありがとう」と言ってもらえた日々でした。



白井吉見文学館の「展覧」展示ケース

白井吉見文学館の指定管理を夫が所属する団体がすることを聞いてはいたが、私には全く興味が無かった。それが、人手不足なので週一日で良いから文学館の受付をしてくれと頼まれた。乗り気では無かったが、入館者は少ないし、暇なら読書していれば良いというので、承諾した。朝、入口の鍵を開け清掃をして入館者を待った。やはり一番気を使ったのは、戸締りや火の用心だった。当日の日誌を記入し終ると、何度も指差確認をした。白井吉見の事は僅かしか知識が無い。兎に角『安曇野』だけは……と読み始めたが、登場人物の多さにびびり。助け舟となつたのが、赤羽康男さんの著書『白井吉見の「安曇野」を歩く』だった。わかり易く面白い。館にも置いていただいて、来館者に勧めた。

友の会も発足し、受付係の中で、パソコン操作出来るのは私だけだったこともあり、事務局員を仰せつかった。家ではほぼ毎日パソコンに向かう事になった。当番の日に、暇なら読書どころでは無くなった。

思い出に残るのは、友の会総会を初めとする数々の行事と、それに付随する様々な事務局の仕事。友の会カードや講演会のチラシの作成もした。

平成二一年から始つた研修旅行では、旅行会社との交渉、ミニパンフレット作成、当日の集合写真等の撮影、後日の写真印刷、参加者への送付等忙しかったが、楽しかった。写真に関しては、今は鬼籍に入られてしまった黒岩淑人さんから「友の会だより」に載せる写真、小口さん何か無い？」と度々請われ、何度か使つて頂いた。

沢山の貴重な経験をさせて頂いたが、平成二四年五月に総てを辞した。改めて言えるのは指定管理が成り立っていたのは、活発な友の会活動があったから。この原稿を書くに当たり、もう開ける事は無いと思つていた心の中の文学館ファイルを開けてしまったが、随分昔の出来事に思え、懐かしさの混じつた不思議な感覚の中に居る自分がある。



文学館前の緑園 撮影 小口美知子
友の会だより「常念とれんげ」第16号見出し

私は平成二四年七月一日より文学館勤務となり、その年の一〇月に行なわれた友の会恒例行事である秋の研修旅行に初めて参加、木曽路文学の旅に始まり、以来一昨年の徳富蘆花記念文学館めぐりまでの八年間、事務局として関わってきた。毎年実施にあたっては、無事にバス一台の人数が集まるだろうか、そんな心配が無いわけではなかったが集合写真の笑顔が物語るように今まではいずれのプランも好評で、一度の参加で次回を楽しみにされる方も始め私達のプラン作りにも俄然力がいはいようになつてきた。同じ趣味を持つ人との旅は初対面でも違和感無く話はずむもの。それからは私も自分のできる事で、もっと喜んで頂きたい、研修旅行のファンになつて欲しい、そんな思いから、おまんじゅうづくりを思いつきおみやげにすることにした。好きな事は朝の三時起きも苦にならずせせと作れた。よくよく考えてみると元々歌うことが好きで、ましてバスに揺られながら歌える機会なんてそうあるものではない。今思えば私の身勝手な発想から「おまんじゅうで私の耳障りな歌も許してもらえないかな？」、そんな気持ちもあつたように思う。ある年の旅行のコースで「水師營の会見」を覚えなければならぬなり、その為、練習を重ね何と歌えるようになり、以前から興味があつた乃木希典の人となりについても知る事が出来、後日ある席で歌つたところ八〇代半ばの方に、とても懐かしいといわれ謹面も見ないで唱和され思いがけない喜びを経験した。又、ある年にはこの旅行が縁で年賀状のやりとりが始まつたり、参加された方から、「良寛 旅と人生」の本を頂いたこともあり、今では私の貴重な愛読書となつている。今、毎年一年後の再開を約束しながら、ふと吉見の座右の銘であつた「邂逅」についてしみじみ思う。人との出会いの不思議さ、大切さ、結びつきの喜びを、私は研修旅行から頂くことが出来た。



研修旅行のしおり

安曇野市白井吉見文学館の管理運営に関する業務を行う指定管理者の募集に就いて、安曇野地域住民ネットワークとして、平成一八年四月一九日、臨時総会を開き、募集に係る申請書類を、代表者渡辺修氏で提出、九月一日より、受付業務をスタートしました。一九年二月一八日「友の会」設立総会、当会員募集に、力を入れる事に。幸いに、二一年度は、二、三〇人迄に、住民ネットワーク、文学館、友の会による顕彰活動が、実つたと思われまふ。平成二〇年一〇月二日、私が、住民ネットワークの代表と成り、二代目の指定管理者となる。一月五日、内川館長と、「自分をつくる」刊行について話合を持つ。復刻では「自分をつくる」と「人生は出会の連続だ」二編とする事に。平成二一年二月一八日、山ノ内町平穏に、小林芳枝さんを訪ねた。白井先生の教え子である。八五才とは、考えられない若さ、車で駅迄出迎えてくれた。企画展の資料をお借りすることにした。後日ご子息さんと、来館、国営公園にも、案内する。尚「自分をつくる」一〇〇冊注文、送付する。大変良い思い出として残っています。

文学館当番として、窓口での受け付け、館内の案内等は、初めから携わつて来ました。二二年三月八日(日) 晴れ、午前一〇時、「信州ふるさと応援団」が二二〇名の団体として来館。三組に分けて、館内の説明をする。始めて来館した人が多く改めて白井吉見を知り、「すごい人だ」「来て良かった」との感想がありました。「自分をつくる」を三〇人の方が、買い求めました。次に吉見のお墓を案内、木々に囲まれた墓の前に、乳房銀杏の大木に、驚きの声が上がりました。墓参後、墓碑「滾滾 泪目(こんこんこつこつ)」の説明をしました。

全員が感心して聞いてくれました。田尻地区の生家は、本棟造りの主屋と屋敷林が、見事に調和されていました。家主の白井正子さんに出迎えていただきました。帰りに、常念校長(佐藤嘉市)が朝礼で「常念を見よ」と白井に言つた堀金小学校へ、雲一つ無い青空のもと雄大な姿を満喫しました。一日が充実した思い出に残る日であった。多くの人と出合、話し合いをして、心が通い合う生きがいを持つ文学館と共に過ごした日々、幸を感じております。



吉見墓碑(堀金白井家)

定年退職後の平成二三年二月から四年余、白井吉見文学館で働かせていただいた。有意義で貴重な時間だった。週二日ほど出勤して入館者の受付や説明などに当たつた。文学愛好者などのほか時には団体客や卒論を書くための大学生、夏には子どもたちも顔を覚えてくれた。

安曇野巡りの途中で立ち寄る来館者も意外に多く、「学生時代に『安曇野』を愛読しましたよ」「白井さんはよくテレビに出ていたので、懐かしいですね」などうれしい会話もあった。

東日本大震災後、友の会が中心となり地元の合唱団体に呼びかけて福島県双葉町支援合唱コンサートが開かれたことがあった。白井さんは昭和六年、初任地として旧制双葉中学校で教壇に立っている。そんな縁からの企画だったが、義援金を贈るため、当時の内川美徳館長にお伴して、車で町役場ごと全村避難していた埼玉県内に行った。仮町役場で記録を渡した後、海岸線沿に出て、さらに北へ車を走らせた。災害の爪跡は半年後とはいえ、まだ至るところにあった。原発事故の影響で無住のままの双葉町まで行くことはできなかった。満州事変の暗雲が漂い農村不況下の時局に、白井さんはなぜ東北の地に赴いたか。不思議に思つていたが、ご子息の高瀬さんは先の講演で、大学を出たとはいえ就職口が限られた時代だった旨、語っていた。

『安曇野』の生原稿の劣化を防ぐため、特殊紙製の箱に小分けして収納する作業をしたことがある。大量の原稿を点検しながら感じたことがあつた。原稿用紙の欄外にまで、いっぱい書き足した原稿が次々と出てきた。白井さんは「この小説は何を投げ込もうとつみこんでくれる紺の大風呂敷であつた」と巻末で振り返っているが、原稿用紙も大風呂敷のようだとうなずいた。

終章に向かい『安曇野』は「うつろな繁栄」を嘆き、ふるさとの暮色を描きながら大団円となるが、困難ないまこの時代に白井さんがおらず、生の声が聞けないことは誠に残念なことだと思わずにはいられない。



双葉中学校修学旅行(中央青広姿の吉見)

二〇一六年(平成二八年)

『安曇野の人びとを語る会』
 白井吉見の長編小説『安曇野』は、全国で販売される月刊誌『中央公論』(中央公論社発行)に第一部、続いて『展望』(筑摩書房発行)に第五部まで連載されました。五冊の単行本がそろってからです。三〇年以上たちます。「あづみの」というネーミングは、白井の造語ではありませんが、全国に知られるようになったのは、この小説のおかげであること忘れてはいけません。

『安曇野』に登場する人物は、四桁の数に上ります。最初の「第一部その一」に四五人の名前があるのですから、全五巻一七章となると大変な数になるわけです。

登場人物で安曇野出身者であったり、安曇野で生涯を過ごした人の総数は、決して多くありません。

小説『安曇野』には出てこないが、この地でいろいろな分野で活躍された人たちが、それぞれそわんざとられるのは当然です。そんな人たちにもスポットライトを当て、どんな生涯を送られたか知る機会を持ちたいという想いから「安曇野の人びとを語る会」が発足しました。

二〇一四(平成二六)年一月から始まり、現在まで何十人もの人たちが登場しました。参加者は多くありませんが、いつもその人物の周囲の人たちまでに話題が広がり、素晴らし、先人たちの魅力に触られました。ご自分の身辺に、話題にしたい人物がおいでになればご紹介ください。



利用した教材の一部

安曇野の人びとを語る会の各回の講座名(一部記録なし)
 二〇一五年(平成二七年)

- 一月一六日 民衆美術運動先覚者 望月桂
- 二月二〇日・三月三〇日 藤森桂谷
- 四月一七日・五月一五日 平林広人とデンマーク国の話
- 六月一七日・七月一七日 萩原守衛の青春時代
- 八月二二日・九月二八日 清沢潤：昭和一〇年代を中心に
- 一〇月一六日 清沢潤の知られざる一面
- 十一月二〇日・十二月一八日 井口喜源治と研成義塾

佐々木重昭

『堀金村誌』を読む会

今、安曇野市文書館では堀金村誌の上、下巻を各一冊千円で販売している。上下巻ともカラーの口絵(写真六〇八ページ)のついた一千ページを越える立派な本であるのに、大変安価である。以前こんなことを弟と話していたら、現在横浜に住んでいる彼は購入して送って欲しいと言ってきた。長年県外に住んで年齢を重ねた弟にとって、生まれたこの土地は、白井吉見と同じくやはり血に繋がる故郷なのである。そんなことを思いながら、我が身をかえりみると、この堀金のことをよく知らないことに気がついた。早速堀金村誌を買って読み始めたが、とても厚い本の為、すぐに挫折してしまつた。丁度その頃文書館で、参加していた読書会のひとつが終わり、この堀金村誌を何人かで少しずつ読んでゆけば読了できるかと思ひ、四五人に参加を打診し後継の読書会として開始した。令和二年九月に始め、現在は歴史編を読み進めているが、子供の頃耳から覚えた地名の表記や由来、お寺やお宮の元々の場所、祖先の離合集散などがよくわかる。またこれらが現在の自分と直に繋がっているため、出席者の全員が時に体験者であり先生であつて、毎回新しい気付きがあり、現在も続いている。



高橋 容子

『安曇野』を読む会

読書会、その名も『安曇野』を読む会が発足したのは、平成元年六月でした。なんと三三年も一つの小説をエンドレスに読み続けてきたのです。

今年七月の案内には「三回目第八三回 読書会 第四部その十六」とあります。三三年間毎月一章ずつ読み進めてきましたが、まだ三回目読み終わっていないの？と思う人がいるかもしれませんが、ほとんど休む月はなくの結果です。こうして振り返ると気が遠くなりそうです。初年からの会員は二人だけです。会員数は十五人から二十人で推移しています。読書会としてはちょうどいい人数かと思われまふ。

さて、この会の発足には旧堀金村の時代この会の発起人、その後長い

斎藤茂の井口喜源治論

二月二日

望月桂と農民運動

二月一九日・三月一八日

清沢清志をめぐって

四月一五日・五月二〇日

安曇野にも来たバーナードローチ

六月一七日

堀金の歌人を語る

七月一五日

松本民芸丸山太郎を中心に

八月一六日

日本画家「井口香山」を話す

一〇月二一日

斎藤茂と山岳画家茨木猪之吉

十一月一八日

同人雑誌から見えるもの

十二月一六日

堀金出身の加藤寿々子と市川房枝

二〇一七年(平成二九年)

一月二日・三月七日・三月二七日

平林広人に学ぶ

四月二二日・五月一九日

望月桂研究(リベルテール七八号)

六月一六日・七月二二日

望月桂研究(リベルテール七八号)

八月一八日

明科発端の大逆事件と宮下太吉

九月一五日

中村大八郎を今に伝える

一〇月二〇日

永田廣志の生涯を語る

二〇一八年(平成三〇年)

一月一九日

自由民権運動と松沢求策

二月一六日

望月桂をめぐる周辺の人々

四月二〇日

白井吉見・赤沢義巳

五月一八日

望月桂の松南高校時代

六月一五日

望月桂を語る

七月二〇日

ピカソの「ゲルニカ」に寄せて

八月一七日

ガリ版印刷・日本の三本指の一人

九月二二日

堀金にあつた白井眼科サロン

一〇月一九日

哲学者「務台理作」を語る

十一月一六日

務台理作の子供時代

十二月二一日

安曇野の文人たち

二〇一九年(平成三一年)

一月一八日・二月一五日

ユリノキと太陽先生

問会の責任者をして下さっていた故米倉氾子さんの熱意とご苦労がはかり知れません。発足の母体である母親文庫の会員だけの仲良しクラブではなく、村の誇り白井吉見先生の『安曇野』読書会。村の老若男女、幅広く参加者をつくるため回覧板を回し、無線で流し、市民タイムスにも載せ、公民館活動の一つとして立ち上げたのです。おかげで男性の入会もあり多様なメンバーで今までやってきました。思えば三三年前といえどもまだ主要メンバーは四十歳代子育て、仕事が大変な頃、でも疲れを見せず毎月一度夜三時間ほど日常を忘れ文学の世界に身を委ねたのです。先生にゆかりの方々を招いての講演会、小説ゆかりの地への一泊又は日帰りの文学散歩も毎年実行されました。中でもご家族のご厚意で白井吉見邸を訪問し書齋など案内していただいて『安曇野』執筆当時の様子などお聞きしたのは忘れぬ思い出です。

読書会の場所は、いろいろな事情で、はじめは公民館図書室、次は文芸館、また公民館へと変わりましたが、そのうち徐々に会員の年齢が上がり、夜より昼のほうが出席しやすくなり昼間に時間変更されました。そして現在は堀金公民館にて毎月第三火曜日午後一時半より行われています。

最初のころは女性が多いためか、読み終わった後はお茶など飲みながら比較的气楽な読書会でしたが、現在は男性のそれも勉強熱心な会員が増えてきて、多くのその章に関連した資料などが添えられ、かなり専門的な読み込みをしていると思ひます。近代文学史のあれこれ、今まで見出し的にしか知らなかった事柄について『安曇野』登場人物の行動などを通して「ああ、そういう事だったのか」と知ることが面白いこの頃の読書会です。

『安曇野』はどこから読みだしても、そしてどこで中断してもそれなりに興味深く得るものがある作品(私見)だと思います。長いからと躊躇せず新たな会員をお待ちしています。



研修旅行

出会いの旅（上田文学散歩）

小平 洋子

（常念とれんげ 平成二三年一月一日号より）
上田文学散歩へのお誘いに乗って、心に残る旅をした。

（一）多津衛民芸館見学

（二）小宮山量平の編集室訪問
事前の予習は（一）について『安曇野』第五巻にかなりの記述があり、小林多津衛先生は、優れた方。だと私は思った。平成一三年に満一〇四歳で逝去されたが九九歳で多津衛民芸館の館長に就任と、館の資料に載っていた。柳宗悦によって目を開かれて以来、集めた陶磁器や染織品が千点を超えている。身の回りの実用品の美に子供たちの目を開かせたい（『安曇野』二四二頁）と願ひ、実行もされた先生を思うと、今回の見学により先生の心の一端に触れ得たのではないだろうかと思う。けれども、決定的な出会いの瞬間は、展示室のご案内の後に吉川徹館長さんの手によって喫茶室・つみんの円いテーブルの上に届けられたお茶と共に訪れたのである。「お茶をどうぞ。ソバちよこは、ソバのためだけに使われたというものでないんですよ。お茶もおいしくいただけます。多津衛先生の器です」両手でやさしく包むようにして持ち上げると、器はたつぷりと大きく円やかで温かい。一口飲むと、おいしさが体中にひろがっていく。掌に包み込まれるぬくもり。寿という文字が二センチメートル四方ぐらいの大ききで前面に、楽しそうに描かれていた。お盆の上に載っているほかのお茶碗を見ると、描かれている絵柄は一つ一つみんな違って、それぞれ温かい唄を歌っているような味があった。



「多津衛民芸館」にて

（二）小宮山量平の編集室訪問 話を進めよう。私の心の中は「会える」「会えない」の言葉を、まるで動詞の活用形を探すみたいに繰り返している。小宮山先生にはお会いできた。この旅に参加しなかったら私には上田市の「編集室」でお話を聞くチャンスなど一生訪れな

かったと思う。まして「童心ひとすじに 小宮山量平」のサインを、理論社出版の『いのち』という絵本（永六輔・文 坪谷令子・絵）に書いていただけるともなかつたらう。今は毎日見ても、先生の優しさだけを手繰り寄せている。

心にしみた北信濃の旅

小林みち子

（常念とれんげ 平成二四年一月一日号より）

今年の友の会の旅行は北信濃文学散歩と聞き、すぐ参加したいと思いましたが。私にとって二度目の一茶記念館、初めての高橋まゆみ人形館、黒姫童話館、高野辰之記念館、中山晋平記念館と盛り沢山で、送っていただいた行程表を見て夢が広がりました。

一茶記念館では、家庭に恵まれなかった一茶が、厳しい自然の中で、わかりやすく心に訴える俳句を残していて、明るく頑張ってと励まされるようでした。立派な記念館と紅葉が始まった林の中に俳諧寺とたくさん句碑があり、町全体が一茶に包まれていました。

広々とした黒姫高原の中にある黒姫童話館は、いくつものコーナーでメルヘンの世界を味わうことができ、雨が降って高原の散策ができなかったのは残念ですが、楽しい時を過ごしました。

高橋まゆみの人形は、十五年前に初めて見た時の感動を忘れられず、また会えると思うとわくわくしていました。人形館はまゆみ人氣が静かな飯山に観光客がいっぱいでした。



「一茶記念館」にて

失われつつある農村の風景の中、よりそう老夫婦やあどけない子供の表情は、ほのほのと懐かしく心温まる思いでした。

高野辰之や中山晋平記念館では、改めて日本人に愛されている原点の歌を残していると感じました。夕暮れの中山晋平記念館のカリヨンのメロディに送られて帰途につきました。

「山は青き故郷」・「水は清き故郷」・「忘れがたき故郷」がいっつまでも美しく残りますように。

山梨県立文学館・美術館を訪れて

晴天に恵まれた平成二五年十月十一日、臼井吉見文学館主催の視察研修旅行「山梨県立文学館・美術館を訪ねて」が行われた。参加者三六名は県立文学館では郷土出身作家山田多賀市（たかいち）の資料を見るなど有意義な一日を過ごした。

山梨に、山田多賀市を訪ねる旅に寄せて

山口 国利

（常念とれんげ 平成二六年一月一日号より）

私の実家は、山田多賀市氏や臼井吉見氏と同じ、安曇野市堀金三田尻の集落で、鎮守の社南側に位置する。多賀市氏の生家と吉見氏の生家のほぼ中間にあつて、学童のころは両家へ度々顔を出していたのでよく覚えている。

それは何故かという、氏神様や道祖神に関わる子供（学童）の諸行事があつて、集落の子供の交流があつたからである。

吉見氏の生家は、兄が三田農協の組合長を長くやっておられ、その子供（次男）は私より二級上で、元気がよく活発だったが、一度私と衝突して、怒った私が棒で殴り、追いつたこともあつた。父親の農協組合長は、温厚な口数の少ない方で、だれとも気さくに応答して話をする、誠実な人柄だった。住居は、大きな樺の木が聳え、白壁の土蔵と広い庭、大きな住宅は、我が家の近所にはない、立派な邸宅だった。

一方、山田多賀市氏の生家には、異母弟が私より二級下におり、よく理屈をこねて、仲間を閉口させていたが、なかなか頭の切れる男の子だったように思う、はじめて彼の家を訪れた時、今にも崩れそうな草葺の作業小屋のような小さな住居から、眼をしょぼしょぼさせて瘦せた父親が顔を出して、小さな声で応答する様



山田多賀市

は、おとなしい優しい人だとの印象を持つた。

多賀市氏が、自伝的小説「雑草」の中で村一番の貧農と書いているが、文字通り今まで見たこともない桁外れの粗末な住居を見て、私は胸のつぶれる程大きなショックを受けたことを覚えている。



「山梨県立文学館」にて

このような環境のなかで育ち、小学四年しか学ばず後は親元を離れて子守奉公、大工徒弟、土方、瓦焼き職人等転々として苦勞を重ね、ついには当時不治の病と言われていた肺結核を患いながら、養鶏と瓦焼き職人を務める中で、小説を書き、病を克服し、さらに農民組合の常任書記として常に小作人の側に立つて活動し、投獄一八回、未決一回の弾圧を跳ね返して屈せず、戦局厳しくなつて来た、昭和一八年には、自らの死亡診断書を故郷の村役場へ送りつけて、徴兵忌避をやつてのけた不敵さ、大胆さには、聞いただけで私のほうが背筋に寒気の走るのを感じる。もしこれがばれたら、重刑を受ける前に小林多喜二のように、特高警察によつて非国民、反逆者として虐殺されたらどうと考えられるからだ。誰も頼ることでできない貧しい生い立ちと、生活の中で培われた、不屈の根性と弱者や貧しい者の側に立つゆるぎない信念には、唯々頭が下がる思いである。多賀市氏が小説家として世に出られるようになったのは、本人の努力はもちろんだけれど、師と仰ぐ『石狩川』の作者本庄陸男氏に出会えた幸運を抜きにしては考えられないだろう。それに熊王徳平氏をはじめ多くの有能な友人に恵まれ、支えられていた影響も無視できない。これも本人の徳の故であろう。私の生家の近所から、片や「かまつち」（屋号）と呼ばれていた地主の家からエリートコースを辿って評論家、『安曇野』の作者臼井吉見氏が、一方極貧貧農の家から出て投獄一八回、徴兵忌避という稀代の人生を送り『耕土』『雑草』『農民』などの小説を世に送った作家山田多賀市氏が同時代に生まれ活躍されたのは、おおきな驚きであり、お二人とも郷土の誇りである。

第四部 年譜等

【白井吉見 略歴】

- 一九〇五（明治三八） 六月一七日、長野県南安曇郡三田村（現安曇野市堀金）田尻、白井貞吉、きちの二男として生まれる
- 一九一二（明治四五） 四月堀金尋常小学校入学
- 一九一八（大正七） 四月松本中学校入学 同級生に古田晃、松本克平、一級上に唐木順三、二級上に堀金村青柳優。冬季は松本安原に下宿、同宿に古田晃。在学中に国語教師矢沢邦彦の影響で文学への興味を強くする
- 一九一九（大正八） 同宿の先輩武居から中央公論をすすめられ、近代文学に接する
- 一九二〇（大正九） 七月六日、皇太子松本中学校へ行啓 天皇制への疑問を抱く
- 一九二二（大正一一） 松本中五年生、相談会長、文芸部委員長となる 校友誌「高嶺」に『ある山小屋の出来事』等を発表
- 一九二三（大正一二） 松本高等学校文科甲類入学、一年以上級の間金井融と親交。校友会誌に詩、評論、小説等を発表
- 一九二五（大正一四） 徴兵検査で甲種合格
- 一九二六（大正一五） 東京帝国大学国文科入学
- 一九二八（昭和三） 東大在籍、上伊那郡中箕輪実業補習学校の代用教員（国文、西洋史）となる
- 一九二九（昭和四） 東京帝国大学国文科卒業 古田晃に将来の仕事について相談を受け、出版業をすすめる
- 一九三〇（昭和五） 二月高崎連隊に入隊 一二月少尉に任官、除隊

【白井吉見文学館 略歴】

- 一九九一（平成三） 七月二日、竣工 館長青柳安昭
- 二〇〇五（平成一七） 生誕百周年
- 二〇〇六（平成一八） 七月第一回れんげ忌 九月市民任意団体「安曇野市民ネットワーク」による指定管理スタート
- 二〇〇七（平成一九） 二月「白井吉見文学館友の会」発足 会長米倉汜子
- 二〇一九（平成三一） 四月安曇野市直営施設となる
- 二〇二〇（令和二年） 白井吉見文学館資料調査開始

【白井吉見著作一覧】

- 一九五六（昭和三一） 『近代文学論争』上 筑摩書房
- 一九五七（昭和三二） 『あたりまえのこと』 新潮社
- 『どんぐりのへた』 筑摩書房
- 『人間と文学』 筑摩書房
- 一九六一（昭和三六） 『十五年目のエンマ帖』 中央公論社
- 一九六二（昭和三七） 『小説の味わい方』 新潮社
- 『むぐり通信』東南アジア・中近東の旅』 筑摩書房
- 『人と企業』成長会社の異色経営者論』 中央公論社

- 一九三一（昭和六） 福島県双葉中学校へ国語教師として就職
- 一九三二（昭和七） 黒岩あやと結婚
- 一九三五（昭和一〇） 一月伊那中学校へ転任
- 一九三七（昭和一二） 同人誌『鳩の巣』を発刊 小説『稲妻』を掲載
- 一九四〇（昭和一五） 六月松本女子師範学校へ転任 附属小学校主事を兼務する 古田晃、筑摩書房を創立する
- 一九四三（昭和一八） 三月松本女子師範学校退職 四月東京女子大学に勤務しながら筑摩書房を手伝う 一〇月、松本連隊陸軍少尉として召集

- 一九四五（昭和二〇） 伐木隊長として九十九里浜に配置 米軍上陸最前線に備える 終戦後、古田晃、唐木順三、中村光夫らと雑誌『展望』を企画、筑摩書房編集長となる
- 一九四六（昭和二二） 一月『展望』創刊 二号から評論欄を設け、執筆する。以降約二〇年間、編集、評論、講演、マスコミ等多彩な活動を展開する。
- 一九五三（昭和二八） 堀金中学校校歌作詞
- 一九六四（昭和三九） 『安曇野』執筆を始める 七月から「中央公論」に連載
- 一九六五（昭和四〇） 六月『安曇野』第一部、筑摩書房より刊行
- 一九六六（昭和四一） 白内障による右目手術
- 一九六七（昭和四二） 三月NHK放送文化賞受賞
- 一九六八（昭和四三） 白内障による左目手術 一二月脳血栓で倒れる
- 一九六九（昭和四四） 鹿教湯温泉で療養 七月、虎の門病院に入院、一〇月退院
- 一九七〇（昭和四五） 一月第二部刊行 以降昭和四七年四月第三部刊行、昭和四八年六月第四部刊行
- 一九七三（昭和四八） 一〇月筑摩書房会長古田晃死去
- 一九七四（昭和四九） 五月第五部完結刊行『安曇野』出版祝賀会』開催 十月「谷崎潤一郎賞」受賞 十一月「安曇野」完成を祝う会』開催（堀金小）
- 一九七五（昭和五〇） 一二月 芸術院会員に推挙

- 一九六三（昭和三八） 『大正文学史』 筑摩書房
- 一九六四（昭和三九） 『安曇野』全五巻 筑摩書房
- 一九六五（昭和四〇） 『蛙のうた』ある編集者の回想』 筑摩書房
- 一九六八（昭和四三） 『人間の確かめ』 文芸春秋社
- 一九七五（昭和五〇） 『一つの季節』 筑摩書房
- 一九七六（昭和五一） 『田螺のつぶやき』 文芸春秋社
- 一九七七（昭和五二） 『近代文学論争』下 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『教育の心』 毎日新聞社
- 一九七九（昭和五四） 『残雪抄』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『ものいわぬ壺の話』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『肖像八つ』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『作家論控え帳』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『事故のてんまつ』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『ほたるぶくろ』 筑摩書房
- 一九七八（昭和五三） 『展望』或る編集者の戦後』 創世記
- 一九七八（昭和五三） 『文芸雑談』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『灼はた談義』 筑摩書房
- 一九七九（昭和五四） 『自分をつくる』 筑摩書房
- 一九八〇（昭和五五） 『獅子座』第一部 筑摩書房
- 一九八〇（昭和五五） 『草刈鎌』 筑摩書房
- 一九八五（昭和六〇） 『白井吉見集』全五巻 筑摩書房

年度	講演会名	演題	講師	期日
平成22	秋の講演会	宮沢賢治～デクノポー精神	はまみつお	9.12
	春の講演会	筑摩書房70周年を迎えて～筑摩書房はどう立ち直ったか～	菊池明郎	3.27
23	白井吉見れんげ忌記念講演会	ふるさとの山	作家、エッセイスト 高田宏	7.12
	秋の講演会	安曇野と「おひさま」の時代に思うこと	申田和美	9.11
	春の講演会	デマが氾濫する情報社会	作家 遠藤武文	3.25
24	白井吉見れんげ忌記念講演会	安曇野のひとびと in 東京	作家、エッセイスト 森まゆみ	7.12
	秋の講演会	「夜明け前」とその史料	島崎藤村学会 水野永一	9.9
	春の講演会	白井吉見と私	橋渡良知	3.24
25	白井吉見れんげ忌記念講演会	「明治文学全集」と白井吉見	作家・評論家 坪内祐三	7.12
	秋の講演会	白井吉見さんから学ぶこと	地域史研究者 中島博昭	9.8
	春の講演会	友 白井吉見と古田と～白井先生から何を学ぶか～	元筑摩書房社長 柏原成光	3.23
26	白井吉見れんげ忌記念講演会	白井吉見先生の文藝と春秋	文藝春秋元社長 平尾隆弘	7.12
	秋の講演会	白井吉見の精神世界をひらいた常念校長・佐藤嘉市の人と心	教育長 橋渡勝也	9.7
	春の講演会	安曇野市出身の作家・山田多賀市さんを訪ねる旅	元信濃毎日新聞社 論説委員 三島利徳	3.22

年度	講演会名	演題	講師	期日
平成27	白井吉見れんげ忌記念講演会	筑摩書房の国語教科書	筑摩書房相談役 熊沢敏之	7.12
	秋の講演会	筑摩書房の本の装丁について	筑摩書房装丁者 白田捷治	9.6
	春の講演会	「精神的な陽転が大事」で私は	元豊科公民館長 内田昭三	3.2
28	白井吉見れんげ忌記念講演会	今 白井吉見が生きていたら	フリーライター、 評論家 永江朋	7.12
	春の講演会	作家山田多賀市さんの魅力 その後半生	三島利徳	3.19
29	白井吉見れんげ忌記念講演会	筑摩書房の現在	筑摩書房社長 山野浩一	7.12
	春の講演会	ガラ紡機を発明した臥雲辰致	松本市文書館長 小松芳郎	3.18
30	白井吉見れんげ忌記念講演会	白井吉見先生の思い出	筑摩書房編集者 持田鋼一郎	7.12
	春の講演会	文学者白井吉見の周辺	市民タイムス特別 編集委員 赤羽康男	3.17
31・令和元	白井吉見れんげ忌記念講演会	文学全集の時代を開いた人	元慶応義塾大学教授 田坂憲二	7.12
	春の講演会	中止「新型コロナウイルス感染症対応」		3.15
2	白井吉見れんげ忌記念講演会	中止「新型コロナウイルス感染症対応」		7.12
	春の講演会	出会いと対話の世界に生きた白井と礫山	白井吉見文学館館長 平沢重人	3.21
3	白井吉見れんげ忌記念講演会	父のあれこれ	白井高瀬	7.12

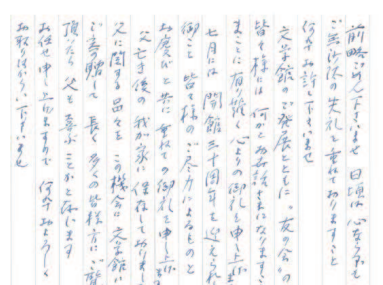
講演会記録等

年度	講演会名	演題	講師	期日
平成3	落成記念講演会	白井吉見先生と「青春の出会い」	明科高校校長 細川修	7.12
4	開館1周年記念講演会	白井先生のこと	元編集長 中島岑夫 吉村昭	7.12
5	開館2周年記念講演会	第1部白井吉見さんのこと 第2部対談増澤フユミ、白井久雄	作家 藤岡筑郎 増澤フユミ、白井久雄	7.12
6	開館3周年記念講演会	白井吉見先生と筑摩書房 私と白井吉見先生	筑摩書房専務、編集局長 柏原成光 女性史研究者 山崎朋子	7.12
7	合併40周年・開館4周年文藝春秋講演会	家族をめぐって	作家 山田太一	9.30
8	開館5周年記念講演会	「安曇野」と白井吉見	作家 堀井正子	7.6
9	文学館記念講演会	筑摩書房の三人	小林俊樹	6.28
10	ふるさと常念の里講座 第4講座	安曇野に生きた白井吉見の世界	小宮山量平	9.29
11	ふるさと常念の里講座 第6講座	ふるさとの生んだ巨きな星白井吉見と山田多賀市	地域史研究者 中島博昭	9.30
12	ふるさと常念の里講座 第6講座	白井吉見・男の友情物語	地域史研究者 中島博昭	不明
13	ふるさと常念の里講座 第5講座	出版文化を興した古田晃と白井吉見	古田晃記念館副館長 立澤節朗	9.29
14	ふるさと常念の里講座 第6講座	白井吉見 人と作品	橋渡良知	11.14
16	白井吉見生誕百年記念「吉見をみつめて」第1講座	座談会 ふだん着の白井吉見	島村ハルミ、増澤フユミ、白井久雄、白井正子、内田昭三、熊瀬ユキミ	6.17
16	白井吉見生誕百年記念「吉見をみつめて」第2講座	小説「安曇野」ゆかりの地を巡る	市民タイムス編集委員 赤羽康男、 清澤潤研究会事務局長 永沼孝致、 礫山館友の会だより編集員 望月武夫	10.16

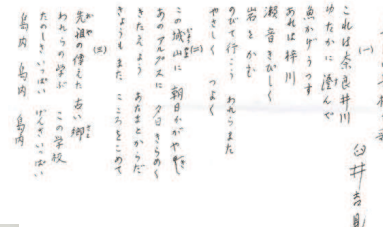
年度	講演会名	演題	講師	期日
平成16	白井吉見生誕百年記念「吉見をみつめて」第3講座	白井吉見と筑摩書房	筑摩書房専務取締役・編集部長 松田哲夫	11.11
	白井吉見生誕百年記念「吉見をみつめて」第4講座	取材の中の「安曇野」と白井吉見	市民タイムス編集委員 赤羽康男	3.15
	白井吉見生誕百年記念「吉見をみつめて」特別展	ゆかりの品特別展示		10.29～31
17	白井吉見記念行事	文学者・編集者としての吉見	作家 三浦朱門	6.18
18	「友の会」設立記念講演会	真の言葉は書物から	【中央公論】元編集長 粕谷一希	2.19
19	白井吉見れんげ忌記念講演会	編集者人生を語る	元筑摩書房編集部長 晒名昇	7.12
	春の講演会	「安曇野」が生まれた頃の白井吉見先生	元中央公論編集者 利根川裕	3.23
20	白井吉見れんげ忌記念講演会	古稀を越えた「不肖の弟子」の正体	ブックデザイナー 折久美子	7.12
	秋の講演会	「ある山小屋での出来事」から「安曇野」まで	藤岡筑郎	11.8
	春の講演会	三つのことばから	信濃教育会雑誌 図書編集主任 上村孝一	3.29
21	白井吉見れんげ忌記念講演会	サクサクと包丁で切る	元中央公論編集長 粕谷一希	7.12
	新春講演会	「蛙のうた」を読んで	作家 井出孫六	1.17
22	春の講演会	安曇の誕生と安曇族	金井恂	3.28
	白井吉見れんげ忌記念講演会	白井さんと父・太宰治	作家 太田治子	7.12

白井吉見関係資料

開館三〇周年にあたって、友の会会員や堀金地域の皆さんに白井吉見に
関連した資料について情報提供をお願いしました。令和三年一二月までに
一六件の問い合わせがありました。



増澤フミ子氏より資料寄贈にあたっての書簡（令和3年
4月25日）



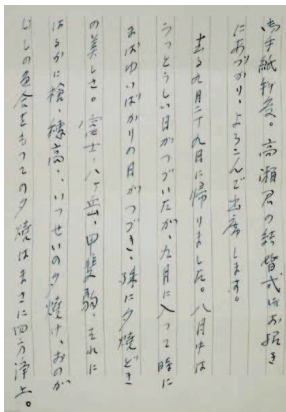
島内小学校校歌パンフレット



昭和41年「広報おじり」



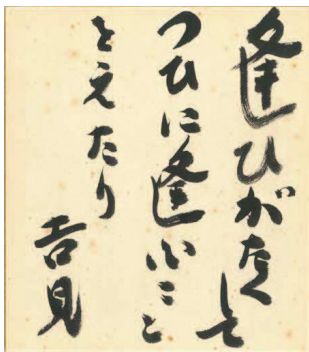
堀金尋常小学校同級会
(昭和49年7月4日)
右から四人目が白井。
白井は東京で生活をして
いたが、地元との交流を
大切にしていた。



唐木順三書簡（昭和52年10月8日）



昭和49年5月30日発行鶴林堂版「安曇野」第五部
鶴林堂版のみ、とびらに白井自筆の言葉が載せられてい
ます。



松本連隊で白井吉見の部下であった方が、終戦
後、白井と再会した場であった色紙

第五部 寄稿

友をえらばば

白井 高瀬

与謝野鉄幹の作詞で「妻をめとらば才たけてみめ美しく情けあり」という唄がある。私の世代は歌ってないが、私が初めて意識したのは戦前の青春を描いた映画の助監督をしていた頃で、メロディが判らないという主演俳優に口伝えて教えた覚えがある。唄はこう続く。「友をえらばば書を読みて六分の俠気四分の熱」その時改めて思った。「こんな三つ揃った奴は私の周りにいないなあ！」

しかし以来、読書タイプ、俠気タイプ、情熱タイプと周りの友人を分けて考えるようになった。圧倒的に多いのは情熱タイプで続いて読書タイプ、希少は俠気タイプだった。

それから数年後、筑摩書房の古田晃さんが突然に亡くなり、両親を車で送ったことがある。話す言葉も無い沈黙の車内でふとこの唄が頭に浮かんだ。松本中学以来の父の友人でいえば哲学者の唐木順三さんは間違いなく書の人で、古田さんは圧倒的に俠気な人、父は精々情熱の人で自らにはない俠気に松本中学時代から憧れていたのではないか、古田さんと父を結びつけたのは古田さんの持つ俠気ではないか、古田宅に近づくにつれその思いは強くなっていった。

更にそれから数年後、北九州市から講演の依頼を受けた父は「郷土が生んだ作家」というタイトルを選んだ。北九州市が生んだ作家といえは火野葦平と松本清張。火野葦平は既に亡くなっていたが松本清張は出版すればベストセラーになるという絶頂期だった。誰もが講演内容はこの二人だと思っていた。ところが父の講演は初めから終わりまで火野葦平の話だけで松本清張の馬の字もなかったという。その夜の会食でも、誰かが松本清張の話をするそつぽを向いて火野葦平の話始めたという。この話の仔細はその夜のうちに東京の松本宅に届けられた。「白井吉見がそうなら、今後顧問をしている筑摩書房からは一切の本を出版させない」と激怒したという。ひよっとすると筑摩書房倒産の一因になっ

たかもしれないこの話を聞いて不思議だった。松本清張は社会の暗黒部分に光を当て、いつも底辺から上を見上げていた。その社会を見る目は、父の好きだった島崎藤村や長塚節と似ててはいるのではないだろうか？ 似るといえば火野葦平と父の顔はよく似てる。広い額、どんぐり眼、小太り。しかし古今東西、似てる顔同士が仲良くなった例は殆ど見当たらない。それなのに何故？

最近、もしかしたらという理由が見つかった。アフガニスタンの不毛の地に用水路を造り60万人の命を救ったというペシャワール会の中村哲医師のことである。これほどの俠気の人はいないだろう。そういえば中村哲医師の祖父は小倉港で石炭の運搬を担った玉井組の玉井金五郎で、強気を挫き弱気を助けた小倉一の俠気の人だったという。納得がいった。玉井金五郎は火野葦平の父親だから、火野葦平は中村哲医師の伯父になる。父は火野葦平に俠気をみただのではないだろうか。俠気で文学を評価したのではないだろうか。いやそうにちがいない。間違いなくそうだ。だから古田晃さんの俠気にも魅かれたんだ。

今や私の妄想は確信に変わっている。

太田 治子

白井吉見先生に初めておめにかかったのは、昭和五〇年代初頭の春三月のことだった。いつのまにか四〇年以上の月日がたっている。その年四月からスタートしたNHK教養テレビの新番組「日曜美術館」の司会アシスタントに選ばれた私は、司会進行役の河路アナウンサー、担当ディレクターの方と共に白井先生のお宅を訪問した。番組で、「礫山荻原守衛」について、お話しただくことになっていった。番組の第一回ゲストが、白井吉見先生であられたことは、思いがけずアシスタントに選ばれたばかりの私にとってはとてもラッキーなことだったと思う。白井吉見先生と私の父太宰治とは、太宰が昭和二三年になくなる直前迄親交が続いたという。愛人の娘の私が、まだ生まれてまもないころのことである。二人とも、お酒が大好きだった。どなたの文章かは忘れただけだ、なかよくお酒を酌みかわすうちにつまみのニワトリの羽根が部屋にふわふわと舞っていたと書かれていた。二人は、そのとき何を話していたのだろう。「彼女は、太宰さんのお嬢さんです」担当ディレクターが

私のことをそう紹介すると、白井先生はその大きな目をしばたかせながら、しばらくうつむいていらつした。

それからまもなくして、先生はNHKのスタジオで、礫山萩原守衛についてお話し下さった。打ち合わせの時とは別人のように、先生は雄弁に話された。同郷の礫山をいかに大切に思っているかが、その熱情溢れるお話しぶりから、ひしひしと胸に伝わってきた。

「お天道さま以外に頭を下げることはないという気概が、穂高を中心にした安曇野にはあります」

白井先生がそのようにいわれたことが、忘れられない。それは、礫山のみならず白井先生も持たれていたものなのに違いなかった。権力とは遠く離れたところで、文章を書き続けていらしたのではないだろうか。

礫山のお話が熱を帯びていらつしやるにつれて、ベレー帽の白井先生のお顔がやんちゃな少年のようにみえてきた。安曇野の清らかなワサビ畑がよく似合う元気な少年の顔だったことを、なつかしく思い出す。

農民文学の今日的意義

三島 利徳

安曇野市堀金出身の山田多賀市さん（一九〇七年～一九九〇年）は山梨県で農民文学作家として活躍した。その代表作『耕土』は白井吉見先生ら五人が編集人となった『土とふるさとの文学全集』（家の光協会）の四に収録されている。

私は山田さんについての評論で第五九回農民文学賞を二〇一六年に受賞、これを基に同年『安曇野を去った男』ある農民文学者の人生（人文書館）を出した。二〇一五年と二〇一七年には安曇野市で山田さんについて講演させていただいた。今は日本農民文学会の雑誌『農民文学』の編集長を務めている。ここ三年の農民文学賞受賞作を紹介してみたい。

二〇一九年第六二回。小説は目黒広一さん（神奈川県）の「なだの海の向こうに」。郷里福島県の雪深い村が原風景。困難を乗り越えて生きる人々を描く。詩集は三〇代柴茜さん（上伊那郡箕輪町）の「命のしずく」。夫と共に牛を飼い娘を育てることに幸せを見いだす。

二〇二〇年第六三回。小説は八〇代玉井裕志さん（北海道）の「風の旋律」。開拓と文筆活動の体験を踏まえた物語だ。詩集は金子智さん（埼玉県）の「源 スベード・ブラデオス」。父の農業の思い出をつづ

をひもとくことは、太平洋戦争の敗戦に至る日本の近代国家としての歩みを振り返り、現在の、そして将来のこの国を考えることであると、あらためて思う。地域の先人たちの生き方に学ぶことは、この松本・安曇野の文化を見つめ直し、未来を展望することにつながると、いままた思う。『安曇野』を手元に置き、繰り返し読む意義は大きい。白井さんがこの大作を残してくれたおかげと言える。

ただ、歳月は容赦なく流れる。昭和という大きな時代が幕を下ろし、平成の三〇年間に瞬く間に過ぎて令和のいま、昭和は遙かに遠く離れた。戦後は七五年を超え、空襲や疎開を体験した少女少女ですら八〇歳を過ぎ、戦地に起き生きて還った青年は九五歳前後に至り、大方鬼籍に入られた。戦争の記憶は薄れに薄れ、風前の灯と言っても過言ではなく、経済大国としての陰りも明らかであるなか、私たちが目指すのはどこまでも平和を希求する文化国家にちがいない。真に豊かな国というのは、国民一人一人が穏やかに生き、長生きして良かったと思える国であって、そこに立ち戻り、次の世代にバトンを渡したい。いみじくも白井さんが主張されていたことである。

参考資料・執筆者一覧

主な参考資料

白井吉見文学館友の会 友の会だより『常念とれんげ』

堀金村公民館 『堀金村公民館縮刷版』第一巻～第四巻

信濃教育会 一九九一『信濃教育』第一二六〇号

特集「白井吉見の人と業績」

池田三四郎 一九七九『通俗民芸論』創世記

特別寄稿（五十音順）

赤羽 康男（元市民タイムス編集委員）

白井 高瀬（白井吉見長男 元映画監督）

る。金子さんは高校教師を経て今は養蜂業を継いでいる。

二〇二一年第六四回。小説は高橋道子さん（宮城県）の「村を囲う」。イノシシ被害への取り組みを描く。仙台市郊外の中山間地に移住しての生活を踏まえている。詩集は二〇代古川彩さん（京都府）の「大地青春」。山形県の高校で寮生活をし、そこでの農業体験の感動をうたい上げている。

日本では戦後、農山村から都会へ人が集まり、産業的にも農業の比重は減った。しかし、農民文学賞の受賞作を見ると、苦労はあっても食べ物をつくる喜び、助け合いの精神や自然環境の大切さ、望郷の熱い思いが伝わってくる。コロナ禍で大都会よりもゆつたりした地方の良さが見直され、信州への移住も目立つようになった。

安曇野をはじめ信州を舞台とした小説や詩、短歌、俳句、評論、エッセイが今後も数多く「農民文学」を飾ってくれたらと思う。

（長野市在住 一九四七年生まれ）

『安曇野』を読む意味

赤羽 康男

私は二〇二一年の夏、四〇年半に及んだ地方紙記者生活に終止符を打った。それは勤め人人生、仕事人生の終わりでもあって、以後何にも所属しない、誰からも拘束されない一個の人間になって、畑を耕したり、書きたいものを書いたりしている。ようやくたどり着いた私なりの「居場所」である。

好きな仕事だったとはいえ、毎日新聞を作り続け、書き続けるのは骨が折れた。とりわけ五〇代の坂を登り切るのは大変だったが、幸いにも四〇代に私は思う存分、編集委員として羽ばたかせてもらった。「白井吉見の『安曇野』を歩く」の長期連載の取材・執筆がその一つで、連載は二〇〇三年六月から市民タイムスの毎週土曜日付に1ページを使って始め、二〇〇七年二月まで四年七カ月続いた。郷土出版社の神津良子社長（当時）から声がかかって、連載中に上巻（明治編）、中巻（大正編）、下巻（昭和編）が刊行され、書店に平積みされるという信じられないような出来事も起きた。いま思えば、私の記者人生最大の仕事が「白井吉見の『安曇野』を歩く」であった。

軍隊、軍国主義を嫌い、対話による平和主義、文化国家の建設を何より望んだ白井吉見さんが、大河小説『安曇野』（全五巻）にこめた思念

太田 治子（小説家）
三島 利徳（元信濃毎日新聞社論説委員）

執筆者（五十音順）

青柳 邦榮（白井吉見文学館友の会会長）
伊藤 正住（白井吉見文学館友の会副会長）
白井 博通（白井吉見文学館友の会運営委員）
白井 泰彦（白井吉見文学館友の会運営委員）
内川 美徳（白井吉見文学館友の会顧問）
小口美知子（元白井吉見文学館職員）
黒岩 喜美（白井吉見文学館友の会運営委員）
小平 信夫（白井吉見文学館友の会運営委員）
佐伯 治海（元白井吉見文学館職員）
佐々木重昭（白井吉見文学館友の会事務局長）
曾山 正子（白井吉見文学館友の会運営委員）
高橋 徹（白井吉見文学館友の会運営委員）
橋渡 勝也（安曇野市教育委員会教育長）
平倉 勝美（白井吉見文学館友の会運営委員）
平沢 重人（白井吉見文学館館長）
細萱 美嗣（白井吉見文学館友の会運営委員）
宮澤 純子（白井吉見文学館友の会副会長）
宮沢 哲二（元白井吉見文学館職員）
山口 良夫（白井吉見文学館友の会運営委員）
横山 温子（元白井吉見文学館職員）
渡辺 修（白井吉見文学館友の会運営委員）

白井吉見文学館地域資料調査員（五十音順）

佐々木重昭
細萱 美嗣
山口 良夫

終わりに

お礼の一言
白井吉見文学館開館三〇周年記念誌発行の運びとなりました。大変喜ばしく思います。

平成元年度に発足し「文学館並びに友の会」（以後文学館）の三〇周年を全面的に協力し、支えてくれた「安曇野」を読む会」の皆さん、「れんげ忌」を中心に立ち上げてくれた伊藤正住さん、講演会等の事業の度に立看板や演題を書いてくれた書家であり会員の立澤久義さんの顔が走馬灯のように私の顔をよぎりました。特に「れんげ忌」は今や文学館の大きな事業のひとつですし、立澤久義さんの「書道」が文部大臣賞を頂いた後、東京から講演に来られた中川美知子さんが自分の名前を書かれた演題を「これは私が記念に」と持ち帰られたこと等、なつかしい思い出もあります。

その他、教師時代の「白井吉見」の教え子の方のご協力も心に残り、教師と生徒の強いきずなに感動しました。いずれも「白井吉見」を身近な大きな存在として文学館を盛り上げてくれた皆さんです。

最後にこの記念誌に寄稿いただいた皆様、企画・編集くださった方々に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

終わりに

白井吉見文学館地域資料調査員 佐々木重昭
ここ数年友の会の会報作りに係わってきて一番苦労したのが原稿をお願いし期限にその原稿を頂くことでした。それ故、三〇周年記念誌の寄稿を多くの方々にお願いし、期限にきちんと頂けるかということが一番の心配でした。ところがいざお願いすると、皆さん原稿を快く引き受け、しかも全員期限内に執筆して下さりました。なかでも、今度力作を寄せて頂き、各々の方が「こぼれ話」の執筆をお願いしたところ、全員力作を寄せて頂き、各々の方が心の奥にあった思い出を書いて下さいました。「こぼれ話」に合う写真など有るかなと思っていたのは余計な心配でした。文学館が多くの方々の熱い思いにささえられている事を実感しました。

楽しい調査でした

白井吉見文学館地域資料調査員 細萱 美嗣
令和二年七月より、白井吉見文学館地域資料調査員として、開館より三〇年間のあゆみを調査整理し、記念誌作成の資料収集を行いました。

開館以来文学館を拠点に、白井吉見に関する資料の収集・研究・発表等を幅広く活動を行ってきましたが、様々な資料や館の活動・研究成果の整理記録が不十分であったため、日誌をつぶさに調べ、そこから様々な参考資料を発見し参照することとしました。特に不明であった貴重な生原稿が発見出来

た時の喜びと興奮は一生忘れません。また、館の運営に中心となって尽力された方々への聞き取りに、全員快く応じて頂きました。
コロナ感染症が蔓延する中、人間生活に文化の力をもたらす心のつながりや相互理解と尊敬心を改めて痛感しました。

ふせんの毎日

白井吉見文学館地域資料調査員 山口 良夫
ずっと本は好きでしたが、仕事をしていたころは、生活に追われあまりゆくり本を読むことができませんでした。農業だけとなったころ、増田小夜氏の「芸者」や、山田多賀市氏の「生活の仁義」を読みました。そのつながりから白井吉見文学館友の会に入会しました。今回三〇周年を振り返ることは、大変な作業でした。文学館と友の会員の三〇年は、様々な人々の様々な思いが、出合いが、てんこ盛だったからです。手当たり次第いろいろな資料を読んがふせんを貼る毎日でした。

そして三八歳で二回目の召集を受けた伐木隊長の戦後の思いは、ふせんの日々だったのではと勝手に思っています。最後に、(長嶋茂雄風に)白井吉見館と友の会よ、永遠に邂逅と対話の日々を、涙々泊々であれ。

『安曇野』は白井そのもの

白井吉見文学館館長 平沢 重人
令和三年四月二五日、増澤フユミ氏より白井吉見宛書簡三六点や葉書六七点を含む資料一三〇点の寄贈を受けました。書簡や葉書の公開に向けて著作権をお持ちの方々五三名に連絡を取らせていただきました。届けられた言葉は「母から吉見先生のことによく聞いておりました。母の懐かしい文字を拝見しました。」にあるように、白井が出会ったひとりひとりといねい交流を重ねておられた様子が伺われるものばかりでした。白井の生き方は、『安曇野』は、出合いと対話の小説である」と語った白井の言葉そのものでした。

白井吉見文学館開館三〇周年記念誌『邂逅』

令和四年二月二六日 発行

編集・発行 白井吉見文学館
協力 白井吉見文学館友の会
〒三九九一八二二一

長野県安曇野市堀金烏川二七〇一
TEL 〇二六三 七二一五二三
印刷 藤原印刷株式会社

